シンポジウム

川とまちづくり
「盛岡の街と北上川」
報告書

平成二十九年度

北上川「流域圏」フォーラム実行委員会 / 岩手大学地域防災研究センター

本事業は（一社）東北地域づくり協会の公益事業の支援により実施しています。

シンポジウム

川とまちづくり「盛岡の街と北上川」

＜概要＞

北上川は豊かな恵みをもたらし、時には厳しい試練を与えてきた流域社会にとって母なる川である。北上川・雫石川・中津川の三川が合流する地の利を活かして発展してきた盛岡の歴史を振り返りながら、北上川を中心とする水辺や清水を活用した「杜と水の都」盛岡にふさわしいまちづくりを考える。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

日時：平成 29 年 10 月 29 日　13:00〜17:00
場所：岩手大学教育学部　北桐ホール
盛岡市上田三丁目 18 番 8 号

〜〜〜〜〜〜〜〜〜　プログラム　〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

■主催者あいさつ■

■基調講演■
①「川からのまちの再生-国内外の事例から-」
②「歴史から学ぶ川の街・盛岡の魅力」
③「富山市における水辺復活への想い」

■パネルディスカッション■
「川・水を活かした盛岡のまちづくり」
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

主催：北上川「流域圏」フォーラム実行委員会 /　岩手大学地域防災研究センター
協賛：（一社）東北地域づくり協会
後援：NHK 盛岡放送局・岩手日報社・岩手日日新聞社

シンポジウム　川とまちづくり「盛岡の街と北上川」

報　告　書

～～～　目　　次　～～～

１．主催者あいさつ
　　北上川「流域圏」フォーラム実行委員会　　委員長　　平山健一　　- 1-

２．基調講演

①　「川からのまちの再生-国内外の事例から-」
　　リバーフロント研究所　　代表理事　　金尾健司　氏　　- 3-

②　「歴史から学ぶ川の街・盛岡の魅力」
　　東海大学文学部　　講師　　兼平賢治　氏　　-10-

③「富山市における水辺復活への想い」
　　富山観光遊覧船株式会社　　代表取締役
　　水の都とやま推進協議会　　理事長　　中村孝一　氏　　-24-

３．パネルディスカッション　『川・水を活かした盛岡のまちづくり』　-37-

①　地域の活動状況　-37-

・北上川に舟っこを運航する盛岡の会　-37-
・盛岡まちなみ塾　-40-

②　盛岡のまちや川の印象　-46-

③　川を活かしたまちづくりの進め方　-49-

④　舟運の可能性　-55-

コーディネーター　　実行委員長　　平山健一
パネリスト
・リバーフロント研究所　　代表理事　　金尾健司　氏
・東海大学文学部　　講師　　兼平賢治　氏
・富山観光遊覧船株式会社　　代表取締役　　中村孝一　氏
・北上川に舟っこを運航する盛岡の会　事務局　　阿部　優　氏
・盛岡まち並み塾　　理事　　金野万里　氏

主催者あいさつ

北上川「流域圏」フォーラム実行委員会 委員長　平山健一

北上川「流域圏」フォーラム実行委員会の委員長をしております平山でございます。

いつもながら、川のお仲間に会えることは、私にとって本当にうれしい機会でございます。きょうは雨の中、このシンポジウムにたくさんの皆様にお集まりをいただきまして、まことにありがとうございました。

このシンポジウムを主催しております北上川「流域圏」フォーラム実行委員会という組織がございますが、北上川で活動しております市民団体を母体としまして、国土交通省、岩手県、宮城県など、行政機関にも参画をしていただいておりまして、官と民が両方で構成する集まりでございます。北上川全体の活性化を目指しながら、活動団体の上下流連携と、顔の見えるネットワークづくりを促進しながら、官と民、そして我々団体同士の情報の共有、意見交換の場を提供してまいりました。

昨年は11月に、北上の展勝地におきまして、流域から、各地からたくさんの参加を得まして、北上川「流域圏」推進交流会議を開催いたしましたが、ちょうど20年前に、当時の北上川流域連携交流会が示したような市民団体の力強い連携、そして活動、そんなものを復活させよう、そういう努力を積み重ねているところでございます。

また、共催の岩手大学地域防災研究センターは、地元で復興支援、地域防災、まちづくりに取り組んでおります。そして、エコリーダー、防災リーダーなどの人材育成にも取り組んでおります岩手大学の教育研究組織でございます。

さて、今回のシンポジウムでございますが、流域地のさまざまな市民団体を流域全体で後押しするために実行委員会が今年から始めた事業でございます。

今年度は、北上川河口から約200㎞に位置します盛岡市で行われております「かわまちづくり」を選ばせていただきました。盛岡は北上川、雫石川、中津川、3つの川が合流する地の利を生かして発展してまいりましたけれども、盛岡の歴史と北上川の役割を振り返りながら、盛岡にふさわしい川を生かしたまちづくりを考えるための機会としていただきたいと願っているところでございます。

まず、基調講演におきましては、公益財団法人リバーフロント研究所代表理事、金尾健司様、東海大学文学部講師、兼平賢治様、富山観光遊覧船株式会社社長、水の都とやま推進協議会理事長の中村孝一様からお話を伺うことになっております。講師の皆様はそれぞれのご専門、お仕事の分野で大変豊かな実績、ご経験をお持ちの皆様でございまして、お話を大変楽しみにしているところでございます。

また、パネルディスカッションにも参加いただきますが、地元の課題を解決するために、ぜひご指導をいただきたいと願っているところでございます。本当にお忙しいところ、遠路はるばる盛岡までおいでいただきまして、心からお礼を申し上げ

たいと思います。

　また、パネルディスカッションには地元の代表のパネラーといたしまして、北上川に舟っこを運航する盛岡の会の事務局長の阿部優様、盛岡まち並み塾理事の金野万里様が参加をいたします。地元盛岡でまちづくり、そして舟運の復活に取り組んでいる熱心な活動家でございます。盛岡の川に、水辺ににぎわいを復活しようと奮戦をしている途中ですが、きょうは無理を言って参加をしていただきました。ありがとうございました。活動の様子、そして現場の悩み等々、ご紹介いただきまして、議論を盛り上げていただくようにお願いをしたいと思います。

　本日は、会場の皆様とともに多様な面を持つ川のまちづくりへの活用を考える機会でございます。どんな成果が生まれるか、期待が膨らみますが、参加者にとって有意義な時間となりますよう願っているところでございます。
終わりになりますが、本シンポジウムの開催につきましては、一般社団法人東北地域づくり協会のご支援をいただいております。会場の皆様には、流域圏の絆を強めていこうとする我々の活動に今後も変わらぬご支援をいただきますことを切にお願いしまして、開会に当たってのご挨拶にかえさせていただきます。ありがとうございました。

平山健一　　（小樽市出身）
　　実行委員長、岩手大学名誉教授
　　元岩手大学学長
　　岩手大学地域防災センター 客員教授
　　岩手県国際交流協会　理事長
　　専門は河川工学・雪氷工学

基調講演①

「川からのまちの再生-国内外の事例から-」

リバーフロント研究所　　代表理事　　金尾健司　氏

皆さん、こんにちは。リバーフロント研究所の金尾でございます。きょうは皆様の前でこのようにお話をさせていただく機会をいただきまして、まことにありがとうございます。

きょうは、「川からのまちの再生」ということで、国内外の事例を踏まえながら、川とまちのかかわりについて、過去を振り返りまして、そしてまた最近の動きを若干ご紹介したいと思います。

私自身は、先ほどご紹介がありましたように、三十数年、国土交通省で河川行政に携わってまいりました。その中でも、河川環境行政にタッチする機会にも恵まれておりました。その辺の経験も踏まえながら、少しお話をさせていただきたいと思います。

さて、きょうお話を申し上げるのはこの4点でございます。「かつての水辺は」、それから「水辺受難の時代」、「水辺の復権」、「かわまちづくりで応援」、この4つの点についてお話をさせていただきます。

～～～　かつての水辺は　～～～

「かつての水辺」。まず、かつての水辺は、人々と水辺はどのようなかかわりを持っていたか、水辺と人々の生活のかかわりについて、ちょっとお話をさせていただきたいと思います。

この数字は、おわかりでしょうか。118 分の 89、江戸時代の末期の浮世絵師に歌川広重という浮世絵師がおりますけれども、彼が江戸の名所を描いた「名所江戸百景」というものがあります。実は百景なんですけれども、118 ありまして、そのうち川や水辺が描かれているのが 89 あります。これは私が水管理・国土保全局長時代に河川環境課の職員に、短時間のうちに調べてくれと言ったものですから、数字自体は若干正確さを欠くかもしれませんけれども、大体江戸の名所の4分の3ぐらいは、水辺、川とかが描かれていたということであります。

例えば、これが広重の浮世絵ですけれども、左側は隅田川にかかる両国橋、右側は同じく隅田川の浅草近辺の風景だと思います。この右側の遠くに山が見えていますけれども、この山が筑波山だと思います。

このように、水辺は美しい風景を形成して、人々が集い、憩うような場所であったということであります。

次に、これは左が江戸のまち、右が現在の東京のまち。ちょうど今の中央区のあたりです。隅田川がありまして、神田川があって、日本橋に囲まれた場所であります。まちの中にはお堀があるというようなことで、このように、川や運河というのはまちの形とかまちのありよう、これを決める役割を持っていたということもあります。

それから、これは隅田川にかかる永代橋という橋がありますけれども、江戸時代の永代橋の風景です。橋詰のところに茶店がありまして、「橋詰」というのは人々が集うような場所です。今でも中央区の日本橋川にかかる橋の橋詰には小さなポケ

ットパークがありまして、トイレなどがあって、散策の途中で休んだりできます。橋詰をどう演出するかというのも大事なことではないかと思います。

それから、次に、川は産業を支えた面もございます。これは北上川の石巻の写真をちょっと持ってまいりましたけれども、船がいっぱいございますね。

それから、これは利根運河です。利根川と江戸川を結ぶ運河なんですけれども、かつて、銚子から江戸に物資を運ぶ大動脈でありました。このように、川は交通や物流という重要な機能をかつては持っていたということであります。

次に、これが生活面で川とのつながりはどうだったかということです。琵琶湖から流れ出る瀬田川という川がございますけれども、写真を見ていただきますと、洗濯をしています。それから、横の男性は、何か障子戸のようなものを洗っていまして、多分障子の張りかえをやったのではないかなと思いますけれども、人々の生活の中で川は普通に利用されていたという面がございました。

それから、これが人と生き物の共生ということで、兵庫県の円山川という川の支川に出石川という川がございます。その様子です。人と牛とコウノトリが一緒に写っている写真です。こんなに近くに人と生き物が共生しているということで、今の日本ではなかなか考えられないというようなことですけれども、コウノトリは、日本の中では豊岡での生息を最後に野生絶滅をいたしました。今は、兵庫県とか豊岡市、それから地元の方々の努力が実りまして、野生復帰に成功しておりまして、今、100 羽を超えたというところだそうです。国交省も、これで円山川の自然再生事業などで湿地の再生などでお手伝いをしているということであります。

それから、これは東京荒川の昭和 9 年の写真らしいんですけれども、子どもたちが荒川で水泳をしているという様子です。昔、川で普通に泳いでいましたけれども、いつの間にかプールに取ってかわってしまいました。このように川というのは遊びの場であったということです。自然の川と触れ合うことで、子どもたちは自然の怖さとかも学んできたのではないでしょうか。

私自身も水泳を覚えたのは川でありました。川の水浴場というのは至るところにございましたけれども、今はなくなってしまいましたが、川の水浴場を復活しようというような取り組みをしているところもありまして、九州の球磨川など、八代市のところで水浴場復活などということを市民団体が一生懸命やっておられる例もございます。

かつての水辺は、こういうふうに人の生活、大変身近にあったということでありますけれども、いずれも受難の時代を迎えたということになります。

～～～　水辺受難の時代　～～～

このように、川というのは大切な存在でしたけれども、高度成長時代には、経済活動とか、人間の生活の利便性が優先をされまして、その存在がないがしろにされていたということであります。

これは昭和 36 年、隅田川の写真で、船に乗っておられる方々の写真です。浅草の吾妻橋という橋がかかっていますけれども、そのあたりじゃないかと思いますが、鼻を押さえて、匂いが相当きつかったのではないかと思います。

今、ＪＲの総武線というのが隅田川を渡っていますけれども、隅田川を総武線が渡るときは、皆さん、夏の暑いときでも、臭くて一斉に窓を閉めたという話を聞いたことがございます。産業排水とか生活排水で川の汚染がどんどん進んだという時代ではなかったかと思います。

これは多摩川の昭和45年ごろの写真。白いのは洗剤の泡です。ひどい状態でした。水門の上に「川をきれいに」と書いてありますけれども、大変空しい感じです。こんな状態だったということであります。

それから、東京の神田川です。歌にもなりました神田川ですけれども、治水対策を急いだあまり、このように無機質の三面張りの川になっております。これは、しかし、やむを得ないことでございまして、高度成長時代に急激に都市化が進みまして、都市水害が頻発をいたしまして、大きな社会問題になりました。とにかく緊急に水害をなくすというためには、洪水を、効率的に流そうと思えば、水路はこういう排水路的な川にならざるを得なかったという事情がございました。

それから、これは東京の昔の川とか水路を描いた図です。毛細血管のように川や水路があったということがわかります。今どうなっているかというと、これらの川、水路、大部分が埋められております。地下に暗渠になっているという川もあります。戦災復興のとき、瓦れきの処理で川を埋めてしまったという事情もあったと聞いております。

これは東京の中小河川。わずかに残った川も、暗渠や、それから、蓋をかけてしまえと、蓋かけの対象になりました。東京都では、東京都市計画河川下水道調査特別委員会、そういう委員会がつくられて、いろいろ議論して答申が出されています。昭和36年です。その内容は、この絵のとおりで、もともと川であった赤い部分、これはもう川じゃなくて下水道にしてしまえ、下水道幹線にしてしまえと。下水道幹線として暗渠化する。それから、黄色いところがありますね。黄色いところも、ふたかけをして、その上を公園とか道路で利用しよう、そういう答申が出ています。

当時は、都市環境の改善、これは急務でございました。水質汚濁とかございまして、下水道の整備が急がれておりました。新たに下水道をつくるよりも、今ある川を下水道にしてしまったほうが安上がりだし、水のなくなった川はそのまま放っておきますと、ごみ捨て場になってしまう、そういう環境面もありまして、ふたをかけて、その上を利用したほうがいい、そういう発想でした。地域の住民からもそういう要望が出ていたという時代でありました。

渋谷の駅の前を流れていた渋谷川、その支流に河骨川という川がありまして、今は暗渠になっていますけれども、この川が童謡の「春の小川」のモデルになった川だと言われております。

今では、この答申に基づいて、渋谷の駅前よりも上流のほうは下水道になりまして、暗渠になっております。渋谷川です。駅の下流のほうは、かろうじてオープンの水路になっておりますけれども、妙な形の川でありまして、U字溝のような形になっておりまして、これは何かというと、すぐにいつでもふたをかけられるようになっている、そういうことらしいですけれども、かろうじて渋谷川も駅より下流のほうはまだオープンの水路で残っております。

幸いにも、全てがこの計画どおりになったわけではございませんけれども、今、日本橋川の上空の高速道路を撤去して地下に持っていこうという議論が進んでおります。そういう議論が進んでいる現在から考えると、ちょっと感覚の違いを覚えざるを得ないということです。

このように、一時期、水辺は大変忘れられて、痛めつけられて、受難の時期を経て現在に至ってきたということであります。

～～～　水辺の復権　～～～

さて、これから水辺が復権してきたという話をさせていただきたいと思います。ちょうど私が建

設省に就職をいたしましたのが昭和58年でした。それから数年ぐらいたったあたりから水辺の価値を見直そうという動きが出てきたように思います。

例えば、まちづくりと一体となった河川整備を進めようということで、「ふるさとの川モデル事業」とか、「桜づつみモデル事業」、「マイタウン・マイリバー整備事業」、そういうものができた。これは昭和の終わりごろ。それから平成に入りまして、平成2年には「多自然型川づくり」、そういうものが始まっております。ちょうど30年前からそういう機運が出てきたということではないかと思います。

高度成長時代も終わりまして、安定成長の時期に入りました。社会も物質的な豊さに加えて、心のゆとりとか豊かな環境を求める時代になってきたということではないかと思います。河川にも、かつての多様な機能を生かして、豊かで充実した社会、それから生活の一部として見直そうという動きが出てきたということです。

平成9年に河川法が改正をされました。法の目的に、河川環境の整備と保全が明確に位置づけられまして、今年はそれからちょうど20年の年に当たります。

これは広島の太田川の派川の京橋川の川べりにこういうオープンカフェができています。広島市は、平成の初めごろから、「水の都ひろしま」の構想をつくって、太田川を活用したまちづくりに取り組んでおります。その一環として、全国に先駆けて、十数年前になりますけれども、社会実験として河川敷地内にこういうオープンカフェの営業を認めたということです。これらの社会実験を踏まえて、河川敷地占用許可準則という決まりがあるんですけれども、これが改正されまして、今では、一定の条件を満たせば、河川敷で民間による営業活動が可能になっております。

写真にある京橋川、3つぐらいのお店があります。年間の利用者は約10万人ぐらいということで、大変にぎわっているところであります。

それから、これは隅田川のちょうど浅草のあたりですけれども、準則の特例を使った東京都の第一号のコーヒーショップができておりますけれども、桜の時期は大変きれいであります。

それから、これは準則の特例ではございませんけれども、長井市のフットパス、街中の周遊路と河川管理用の通路、これをネットワークして、舟運で栄えた長井のまち、これを歴史を感じながら散策できるようになっています。後ほどご説明します「かわまちづくり制度」というものを活用して整備が行われております。

それから、松江堀川です。松江城は、このたび国宝に指定されました。かつてヘドロのたまった汚れた川、河川でございましたけれども、ちょうど隣に宍道湖という湖がありまして、そこからきれいな水、浄化用水を導入して、画期的に水質が改善されまして、お堀に遊覧船が運航されるようになりました。年間30万人を超える利用者があるということで、松江の観光に一役買っているということであります。

最後の日本の例は、円山川。先ほどのコウノトリのです。平成16年に大水害がございまして、緊急的、それから大規模に河川改修を入れていますけれども、単に治水のための河川改修をやるだけじゃなくて、コウノトリの餌場になるような湿地もつくりながら河川改修していこうという多自然川づくりをやっています。

外国の例です。テキサス州のサンアントニオ川。川沿いにこういう遊歩道、リバーウォークというのがありまして、遊覧船も運航しております。かつてメキシコの領地でありましたので、スペインの影響を受けた古い町並み、これを生かした川周辺のまちづくりが行われているということです。

1930年ごろから始まった計画なんですけれど

も、その後、1960年前後にもう一度再生をされまして、現在に至っているということで、ちょうどリバーウォーク、水面との差が20～30㎝ということで、大変スケール感としていい感じです。手すりは全くございません。

なぜこんなことができたかということですけれども、もともと水害に悩まされていたまちなんですが、上流にダムができた、それから、ちょうど曲がりくねっているところにショートカットして洪水を流しやすくしたということと加えて、地下の放水路をつくって、洪水対策を行いました。市内を流れる蛇行のところは、両方が水門で締め切られているので、洪水の心配がないということで、ああいう利用ができたということで、治水と水辺の整備をどう調和させるかというのがなかなか難しい問題ではないかなと思います。

それから、ドイツのデュッセルドルフ、これはライン川です。河畔がこんなににぎわっているということ、古い町並みと調和していい風景なんですけれども、ここは何をやったかというと、実は川沿いに道路があって、川とまちが分断されていたんですけれども、道路を全部地下に入れて、川とまちをつなげたという例であります。

既にある川沿いの道路、それも建物の施設と水辺の施設とをどう調和していくのかというのは、これも大変難しい問題だと思います。

これはセーヌ河です。河畔、ここ実は人工ビーチをつくっているんですけれども、ここは普段のときは高速道路なんです。高速道路なんですけれども、バカンスで海に行けない人たち、まちの中でこういうふうに親しめるということで、夏の間の1カ月だけ、こういう人工ビーチをつくって、設置されているということで、これも同じところです。なかなか日本ではこういう発想は起きないんですが、水辺の利用というのは、いろんな発想でできるということではないかと思います。

それから、お隣の清渓川（チョンゲチョン）です。これは有名ですね。高速道路を撤去して、地下にあった川をもう一度地上に復活させたというものであります。高速道路をなくしたんですけれども、ここはかわりの道路をつくっていないのです。つくらずに、高速道路だけを撤去したというのは、大変すごいことだと思います。

日本では、道路をなくして川を復元するというところまではなかなかいけない。日本橋川でも、高速道路が老朽化して、それを何とか更新しなければいけないという事情もあって、今、それを地下に入れようかという話が進んでいるのであって、なかなか川単独でこういうことをやるというのは難しいのではないかと思います。

で、清渓川のこれはソウルのど真ん中です。こんな感じです。昔は、できた当時、行きましたけれども、コンクリートでつくって、いかにも人工的だなという感じはしましたけれども、十何年たちまして、大分草や木が生えてきて、いい感じになっています。これも同じです。魚も結構いっぱいこの中にいたりしています。川の流れにもいろいろ変化をつけてあります。

次、マラッカ、これはマレーシアの事例です。首都のクアラルンプールから車で2～3時間のところに古い都のマラッカというのがありまして、観光地でもあります。市内をマラッカ川という川が流れていて、クルーズもできるようになっています。その様子がこんな感じです。川の両岸が全部遊歩道になっていまして、店舗や住宅がずうっと続いている。その中をクルーズもできる。

多分、もともと市街地は川に背を向けていたと思います。川側に前出しで遊歩道をつくったので、徐々に川のほうを向いてきたのではないかなと思います。大阪の道頓堀川も同じような形で、遊歩道をつくって、まちがこっちを向いてきた、それと同じようなやり方で、似ているんじゃないかと

思います。こんな感じです。

～～～　かわまちづくりで応援　～～～

最後に、「かわまちづくり」のお話を残った時間でさせていただきます。これからのかわまちづくりを考える上で、キーワードを３つ挙げてみました。

まずは、「つくる」から「使う」へ。これまでの水辺整備といえば、河川管理者が計画をして、河川管理者が整備をして、でき上がったら、さあ、どうぞ、使ってください、そういうやり方をしてきたのだと思います。しかし、どうでしょう、そのようにつくった、整備した水辺が活用されずに荒れ放題になっているという場所をいろいろなところで見かけますよね。水辺をどう使うかと、地域の活性化にどう役立てていくのかということを考えずにつくるということを優先したからそういうことになったんじゃないかと思います。

これからは、使う発想からスタートして、そのために必要なものをつくる発想に転換。それから、つくれば、つくった後にも育てるということが大事だと思います。使う発想から、つくって、それを育てていく、そういう発想が大事じゃないかなと思います。

それから２番目は、市町村や民間が主役ということです。では、使うのは誰かというと、地域振興や、地元経済の活性化を担うのは地元や民間の方々です。そのために、うまく水辺を使っていただく主役は市町村とか民間ということになります。

それから最後、河川という公共空間で営利活動は可能に、と書きました。河川敷地占用許可準則が改正されて、一定の条件のもとでオープンカフェなどの民間による営業活動が可能になった。これは非常に大きいことだと思います。従来の河川管理の視点からすると、やむを得ない公共的利用、例えば橋をかけるとか、それ以外は排除してきたところに、河川が目指す多様なサービスを活用しようという発想が入ったということはとても大きいことだと思います。もちろん、私利私欲追求ということではなくて、河川の維持・向上にも寄与してもらうということが前提であります。

川の活動も、何から何までボランティアでやれというのは、なかなかしんどいのではないかと思います。活動が持続可能になるための、少し営業活動をしながら活動を持続していくということは、これも大事なことではないかと思います。

幾つか私たちの研究所のかかわった例をご紹介しますと、浜松ですか、「軽トラ市」というのをやっていまして、これは常設ではありませんけれども、こういう活動で販売活動などもやっているところもございます。

それから、岡山城の周り、旭川という川が流れていますけれども、ここの水辺を活用しようと。水辺だけじゃなくて、岡山市街地自体の活性化にも役立てていこうということをやっております。

それから、これは岡崎市の矢作川の支川に男川という川があります。岡崎も家康が生まれたまちということで、城下町ですけれども、そういう城下町と男川というのを結びつけて、まちの活性化を図ろうという取り組みをやっています。

旭川の例にしろ、この男川の例にしろ、市や地元のＮＰＯが主役で、一生懸命試行錯誤を重ねながら進めていこうとしております。まさに「使う」発想でやられている例ではないかと思います。

それから、かわまちづくり制度で、国交省はいろんな形でかわまちづくりを応援をしています。その一つがこの「かわまちづくり支援制度」です。現在、全国で150カ所ぐらい、これの対象になって進めていると聞いております。

申請の流れは、こんな感じで、市町村とか住民とか、河川管理者が一緒になって、まず計画をつ

くってということになっています。ここでは手続の詳しいお話はしませんが、一つお話し申し上げたいのは、使う発想で制度を活用していくということが基本だろうと思いますけれども、今は、民間の人が発議して、こういうことをやってくれという制度になっています。そういうふうに改正をして、今までやったのは、河川管理者とか市町村が中心に、じゃ、計画をつくろうかということでしたけれども、民間の人が発議してもいい、そういう制度になっています。まだ使われたかどうか、私もわかりませんけれども、制度上、民間がやろうと手を挙げても、そこからスタートもできるという制度になっております。

時間も参りましたので、私の話は以上でございます。どうもご清聴ありがとうございました。

金尾健司　氏　（京都府出身）
リバーフロント研究所　代表理事
昭和58年東京大学大学院卒業、建設省入省
国土交通省 九州地方整備局長
国土交通省水管理・国土保全局長を歴任

基調講演②

「歴史から学ぶ川の街・盛岡の魅力」

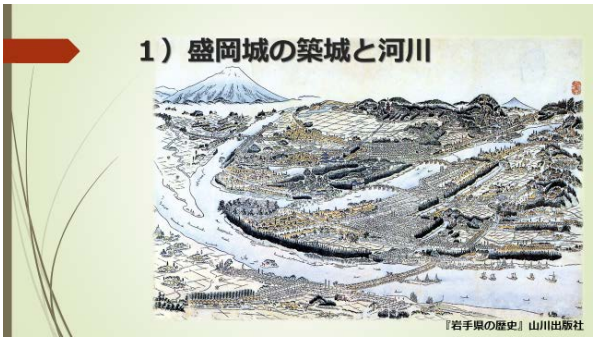
東海大学文学部講師、兼平賢治　氏

皆さん、こんにちは。今ご紹介いただきました東海大学の兼平賢治と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

私は、実は岩手県の出身でして、しかも岩手大学の卒業なんです。岩手大学の教育学部で、もともとは岩手の教員になりたいということもあって教育学部に進みました。ですから、ここのホールで学生のときには勉強していた人間なんですけれども、その後、東北大のほうに進みまして、現在は、3 年前から東海大学の文学部のほうに勤めております。

ですので、フィールドとしては、盛岡藩のことをやっておりますので、今回、盛岡の発展と、それから北上川の関係について、私のほうでは話をしていきたいと思います。

この絵図、よく出てくるんですが、鳥瞰図です。



お城がどこにあるかというと、ここになるわけです。ここが中津川です。そして北上川がこういうふうに流れている。それから雫石川です。盛岡というのは、この 3 つの河川、これがちょうど合流して流れていく。新幹線などに乗って盛岡へ来られる方は、こう上ってきますので、この合流地点というのをよく見られるかと思いますけれども、この川の存在が非常に盛岡の発展には大きくかかわっているんだということでお話をしていきたいと思います。

盛岡、ここが城下になるのは、江戸時代になってからということになるんですが、では、そもそも盛岡藩というのはどうやってこの城下を形成していったのかということなんですが、盛岡藩の殿様、これは南部氏なんです。南部氏というのは、レジュメ、史料のほうに書いておりますけれども、中世以来、青森県の三戸を拠点として勢力を持っていた。

その後、九戸一揆、九戸政実の乱ということで、豊臣がやってきて九戸城を包囲して、九戸氏を滅ぼす。その後、南部氏は、このところだけではなくて、南に稗貫、和賀というところがあるんですが、ここまでを支配するようになった。そうしたことで、三戸では北過ぎるということで、居城を今の盛岡、ここに移す必要が出てきたということなんです。

この移す際に助言をしたというのが、ここに写真を載せておりますけれども、蒲生氏郷などが九

戸の乱のときにやってきて、初代の殿様になる南部信直という人に助言をして、盛岡にお城をつくってはどうだということで、盛岡に築城することになったということです。

では、盛岡城がつくられたのはいつかということなんですけれども、慶長 2 年(1597 年)または翌年慶長 3 年、このころから城づくりが始まったというふうに言われています。

ですので、慶長 2 年ということを考えると、ことしはちょうど築城 420 年ということで、イベントなども開かれています。

何で盛岡かということなんですが、それは一つには、花崗岩台地であって、非常にいい石がとれる。

これは岩手公園ですけれども、今は盛岡城跡公園となっていますけれども、これがお城の石垣です。これが建築当初の石垣がまだ残っているところですね。こっちのほうは非常に細かい石がきれいに並んでいるんですが、これは盛岡城を徐々に整備していきますので、こちらのほうは江戸時代の前半に拡張した際の石垣になりますけれども、これは慶長のころにつくられた石垣、これが表面に出ているところになります。

非常に立派な石垣なのです。盛岡、地元の方が見ると、石垣しか残っていなくて、お城がないからちょっと残念だなと思われるかもしれませんけれども、実は九州大学の先生が盛岡にやってきたときに、ちょっとお城を案内してくれませんかというので、連れていったんですね。そしたら、こんな立派な石垣があるんだということで驚いていたんです。

何でかというと、先ほど言ったように、盛岡城というのは、豊臣政権になってから築城されていますので、その当時の石垣のつくりというのを用いています。ですから、非常に立派なんです。西国のほうも、織豊期、信長やあるいは豊臣のころにつくられますので、非常に立派な石垣が多いんです。

それに対して東国というのは、古くからの山城などが多いものですから、こういうふうな立派な石垣というのは東北のお城でもなかなか見ることはできないんです。

先ほど言ったように、盛岡というのは花崗岩台地ですので、非常に大きな石を見ることができる。これは盛岡城のところにある烏帽子岩ですけれども、非常に大きな石。その前にあるのが、こんな大きな、なかなか写真だと伝わらないかもしれませんけれども、私が寝ころがってもさらにそれよりも大きな石がお城の中にある。

この石切り場というのが、本来はお城よりも離れたところにあるはずなんですけれども、盛岡城の場合は、すぐ近くにこれだけの石がとれますので、石切り場がまさにお城のところにあって、どんどんと石垣をつくっていったということです

これは中津川ですけれども、ここに石があるように、夏などには子どもたちが遊んでいたりする風景がよくテレビでも映し出されるというぐらいに大きな石がある。それによって立派な石垣がつ

くられたということです。

それから、先ほど見ましたように、中津川と北上川、これが天然の堀の役割を果たしている、そういうことで、この盛岡の城は非常に堅固なところ、ということでも盛岡に築城されたということです。

このお城づくりですけれども、豊臣秀吉とか、初代の南部信直、これが相次いで亡くなったために中断をしたり、それから、北上川、これが当時は暴れ川でしたので、氾濫すると、盛岡城をせっかくつくっているところに被害を及ぼしたりして、なかなか難工事だったわけです。

それがようやっと盛岡城が居城として定まるのが寛永 12 年(1635 年)、将軍で言うと 3 代の家光のころになるんですけれども、そのころにようやっと南部氏の居城としての盛岡城が定まりました。

では、城下としての発展はどうかということなんですけれども、城下としては、割と早くに発展していきます。城下町の発展と大きくかかわっているのが、盛岡市内を流れる中津川の欄干、「上の橋」と言いますけれども、そこの欄干に、これは擬宝珠(ギボシ)がついているんですが、この擬宝珠というのがいつつくられたものかというと、慶長 14 年(1609 年)です。だから、江戸時代というのは 1603 年に始まりますから、江戸時代の初期につくられたものが、まちの中にこうやってあるわけです。これは非常に貴重なんです。盛岡の人たちは見慣れていますから、「ああ、擬宝珠があるな」ということなんですけれども、慶長の初めのころにあるわけです。戦争のときに、当然鉄類ですから、これは供出の危機にあったわけですけれども、国の重要美術品に指定されたことによって、これは守られたわけです。本来であれば、博物館のガラスケースを通して見てもおかしくないようなものなんですけれども、それがこうやってある。しかもいたずらされることもないわけです。ここが非常に盛岡のいいところだなと思います。

それから、下の橋にもこの擬宝珠があります。こちらの擬宝珠は慶長 16 年(1611 年)につくられたものがあるんです。本来、江戸時代は上の橋と中の橋に、欄干のところに擬宝珠があって、下の橋にはなかったんですけれども、現在、中の橋というのが近代橋になったことから、上の橋と下の橋、こちらのほうに擬宝珠がつけられているということになります。

この上の橋、中の橋、下の橋、そして擬宝珠というものがつけられているというところからも、城下町の形成ですが、これが慶長年間の後半ぐらいにでき上がっていたということがわかるということです。

盛岡城下には、多くの周辺の有力な寺院、これも集められることになります。それから、史料編のほうで挙げておきましたけれども、史料の二のほうには、慶安 4 年(1651 年)の盛岡 23 町の町の書上というものを挙げておきました。

ですから、1651 年のころには、盛岡 23 町というまちも形成されていったということがわかります。

史料の二をちょっと見ていただくと、例えば地元の方々はわかると思うんですけれども、「自今以後は磐手町をば材木町」と。材木町は今、北上川のそばで、非常にきれいなまちづくりを進めていますけれども、材木町。それから、屋根葺町というのは「葺手町」というふうに名前を変えて、23 町がそろった。そういうこともありますので、この擬宝珠ができたのが慶長年間、それから、23 町、これがしっかり整ってくるのが慶安年間ですので、17 世紀の前半には盛岡城下というのがしっかりと形つくられたということがわかります。

その盛岡城下が発展していく重要なキーワードとしては、やはり北上川があるわけです。
北上川というのは、ここに書きましたけれども、新山河岸、ここは舟橋がかかっているんですね。

ここを「新山舟橋」と言っていますけれども、新山河岸は北上川の舟運の起点になっているわけです。盛岡からずうっと南の石巻のほうまで北上川が流れているわけです。そこの拠点なんですが、水運の拠点というだけではなくて、新山河岸は奥州道中の城下への玄関口でもありました。ですから、江戸からやってきて、奥州道中、ずうっと続いてきて、盛岡城下に入る。こうやって盛岡城下に入っていくわけですけれども、その玄関口にもなっていますので、水路においても、それから陸路においても、この新山河岸というのは非常に重要な拠点になっていたということです。

この北上川舟運、これが使われるのはいつぐらいになってからかということなんですけれども、政治の中心地、これが豊臣政権期というのは大坂、京都、これが政治の中心ですから、そうすると海運も太平洋ではなくて、日本海の海運、これが重要な意味を持っていたわけです。

ところが、江戸時代になると、政治の中心は江戸になってきますので、江戸に物資を送る必要が出てくる。そこで、海運も、それまで中世は日本海海運が非常に盛んだったんですけれども、太平洋の海運、これを使うようになるんだということです。

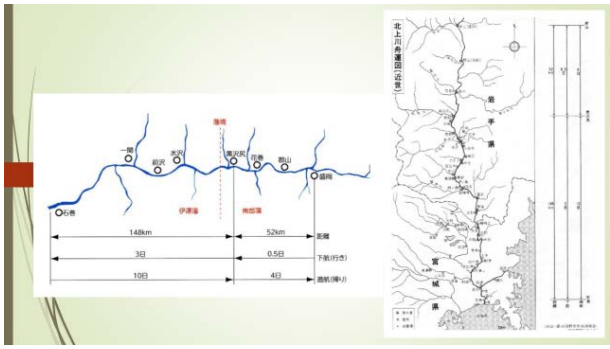
それから、江戸を拠点としますから、北上川、これも非常に重要な物資を送る道ということで使われるようになります。

ただし、北上川、これが物資の輸送として主に利用されるようになるには、北上川の河口を改修する必要があったわけです。それまではどうしていたかというと、内陸の盛岡から沿岸のほうに物を運んで、それからようやっと船で運ぶということをしていたんですけれども、元和 9 年(1623 年)から北上川河口、宮城県の石巻、こちらのほうが改修工事されることによって徐々に盛岡藩は、北上川を使って物を送るということになっていきます。盛岡から石巻に送ったものが太平洋を通って江戸に運ばれていく、ということになるんだということです。

盛岡では、寛永年間、1624～44 年を寛永年間と言うのですけれども、そのころには石巻に米を回漕するようになっていきます。石巻に盛岡の蔵もあったんですけれども、それが正保 2 年(1645 年)に石巻に盛岡藩のお蔵、これが建つわけです。そして慶安 3 年(1650 年)には黒沢尻、北上ですね、そこにお蔵奉行が任命されていることから、17 世紀の中頃にはこの北上川の舟運というのが非常に重要な役割を果たしていったということがわかります。

北上川舟運ですけれども、では、盛岡城下から

石巻までどれぐらいかかっていたのかということですが、盛岡から黒沢尻まで、船で行くと大体半日ぐらいで行けた。さらに黒沢尻から今度ここは藩境で、仙台藩領に入るわけですけれども、仙台藩領を通って石巻まで行くまでには、大体 3 日、



4 日かかっていたというふうに言われています。

逆に、石巻から、私たちは盛岡から石巻に流れていく方向を強く意識するんですけれども、これは上ってくることもあるわけですね。そうすると、上ってくるのには大体 10 日ぐらいかかっていた。3 日で下るところを 10 日かけて上ってくるわけです。黒沢尻から今度盛岡までは、これは 4 日間ぐらいかかっていたと言われています。

当然、帆を立てたりして風も利用するんですけれども、そう都合よく風が吹くわけではありませんから、風がないときには人力でこれを引っ張って船を持ってくるということになっていたということです。

史料の三を紹介したいと思うんですけれども、史料の三はどういうものかというと、本誓寺というお寺が、これは盛岡にあります。その本誓寺の本堂を普請する。本堂をつくる際の入用の材木、必要な材木をどうしていたかというと、仙台領において整えて、「北上川曳き登せ候に付」と、曳き登らせたというふうに書いています。盛岡にある本誓寺というお寺をつくる際に、仙台藩領から材木をずうっと上げてきたわけです。どこに持ってきたかというと、先ほど紹介した新山舟橋です。ここまでその材木を持ってきたということが史料の三、「雑書」というのは、これは盛岡藩の家老席の日記になるんですけれども、天明 7 年 5 月 13 日条を見ますと、仙台領で材木を取り出して、それを北上川を通して盛岡の城下まで引き上げてきたというのです。これは非常に大変だなと思うかもしれませんけれども、では、盛岡藩領でそれだけの材木を切り取って、これを城下に陸路で運ぶのと、水運を使って運ぶのと、どちらのほうが便利かということを考えると、なかなか陸路で大きな材木をいっぱい運ぶというのは大変なんですね。それであれば、やはり水運、北上川、これを利用したほうが効率がよかった、というところもあるということです。

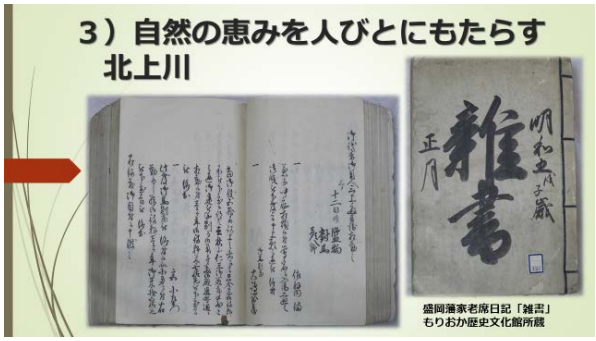
だから、私たちは、何となく北上川というのは下るものだ、石巻のほうに流れていくと思うんですけれども、物が上ってくるということも多くあったし、それから、陸路よりも水路を使ったほうが便利だということも多くあった、その点は踏まえる必要があるかなと思います。

ちなみに、これが現在の新山舟橋があったところにある石碑なんですが、今は明治橋という橋がかかっているんですね。石碑が立っています。そ

のすぐ近くには、盛岡藩の米蔵です。現在は、下町史料館ということで、史料館として活用されていますけれども、これが新山舟橋の近くに米蔵としてあったお蔵です。これが現在は史料館として有効活用されていますよ、ということです。

それから、これが明治橋です。その下のところ、ここに石が積んであるんですけれども、ここがちょうど中島と言って、舟橋を渡していたという跡になります。ちょっと私の写真では見づらいんですけれども、後でもっと見やすい写真を出してくださる方がいらっしゃいますので、そちらで見てほしいんですけれども、こういうふうな形で、現在は跡を見ることができますよということです。この中州のところ、先ほどの中島です。そこを通していたというところが現在も見ることができますよということです。

では、レジュメのほうで 3 のほうに進みます。「自然の恵みを人びとにもたらす北上川」ということで、先ほどもご紹介しましたけれども、盛岡藩の家老席日記というのが、「雑書」というのがあります。これは明和 5 年のものなんですが、江戸



時代の最初のほうから、もう天保年間までずうっと毎日日記がつけられています。この「雑書」を読んでいくと、盛岡藩の日記だからといって、政治向きのことばっかりが書かれているわけではなくて、実は庶民の生き生きとした姿、これも描かれています。

では、どういうふうなことが描かれているのかということなんですけれども、北上川と人々の関係で見ていくと、川漁です。川で漁をする、この許可を藩に求めている人々が多く出てきます。どんなものがとれるかというと、サケ、それからマス、アユです。これを人々は北上川の恵みとしてとっていたということになります。

それからもう一つ重要なのが、山で伐採した春木ですね。これは薪になるものですけれども、これを流して、集積させていたわけです。それを「春木場」と言います。今でも地名として春木場というふうに残っていますけれども、それの集まっている場所です。先ほどの新山舟橋のところにも、雫石で伐採した春木が流されて集まる、そういう場所でもあったんだと。それについては史料の四のほうに載せておきましたので、後でごらんになっていただければいいかなと思うんですけれども、一応線を引いてあるところだけ読みますが、「雫石より御百姓共剪り出し、新山へ川下げ商売仕り候五尺春木」、こういうふうにあって、雫石の山々から切った春木、これを川で流していって、先ほどの新山舟橋のところまで持ってきて、これを城下の薪として利用したということなんです。

ですから、北上川の恵み、これを人々が利用していたということが、この「雑書」からもよくわかります。

それから、単に恵みをもたらしてくれるから、それでいいかというと、そうではなくて、それを保つためには、人々は堆積物の除去、それから流路の確保、これをしなければいけませんので、多くの人々が労働力として駆り出されて、「川除」は「カワヨケ」と読みますけれども、「川除普請」と

いうことで、堆積したものを取り除いて、北上川の流れ、これを使えるようにしていた。それには多くの領民の力というものを使っていたということです。こういった努力があって、北上川というものを人々が使うことができたんですよ、ということです。

では、次に、北上川の新山舟橋の周辺、そこはどういう場所だったのかということでお話をしていきます。単に物の行き来というだけではなくて、慰みの場所であったり、霊を弔う場所として人々に使われていたということを紹介したいと思います。

この写真は、ことしの「舟っこ流し」です。お盆の

盛岡の行事になります。先祖の霊を慰めるということで、戒名など書かれたもの、あるいは御札などを、最初はこういうふうな形で船なんですけれども、花火などが打ち上がったりして、流れていく、このお盆の行事があります。今回、私、行ってきたので、こうやって写真を撮ったんですけれども、こういった行事も、もともとは江戸時代に起源を持っているということです。

北上川については、史料の五を見ていただきたいんですが、史料の五にどういうふうに書いているかというと、「殿様・彦九郎様御慰みとして、北上川御船にて御下り、今晩郡山御仮屋へ御一宿」、こういうふうにあって、殿様が船下りを楽しんでいると。盛岡の先ほどのところから下っていって、郡山、今の紫波町、そこまで北上川で船に乗って下って楽しんでいたということがここに書かれています。殿様にとっても、北上川川下りをするというのは非常に楽しみの一つだったということがこれからわかると思います。

それから、史料の六を見ますと、「新山落合明神」というところ、お宮があったみたいなんですけれども、そこの祭礼として神楽が執行されていて、黒い線のところの2行目のところに「草取り角力」と、これは一般の庶民たちが行った相撲なんですけれども、これが「晴天十日興行」行われたというように、河原で人々が相撲をとったりしていたということがわかりますし、史料の七を見ますと、「花火仕り候儀」とあって、人々は花火を楽しんでいるんですね。

この花火というのは、手持ちで細かくやるものではなくて、その横のところに「新山川原」であるとか、「紙丁川原」であれば、これは広いので、花火をしても火事にならないということで許可されていますので、「放ち花火」とありますので、これは打ち上げの花火です、これが行われていたということもわかります。

このように、北上川というのは、単に物流の拠点としてあったわけではなくて、そこの川原も含めて、周辺地域も含めて見ていくと、非常に人々の憩いの場になっていたということがわかります。

今言った相撲であるとか花火だけではなくて、人々が水浴びをしに行ったという記事もありますし、それからレジュメのほうに書きましたが、「川狩」とあって、川漁です、これをして楽しんでいる様子も描かれていますので、そういった娯楽の場でもあったということです。

それから、先ほど紹介しました「舟っこ流し」という盛岡のお盆の行事になります。この起源というのは、実は盛岡藩の5代藩主である行信という殿様がいるんですけれども、その人の娘さんで、幕姫と、「お幕さん」という方がいます。このお幕さんというお姫様が新山川原において施餓鬼供養

――亡くなった人たちの供養――をするという行事を行ったのが始まりだと言われています。

その後、「舟っこ流し」のホームページには、川を下っていったところに津志田というところがあるんですけれども、そこに遊廓が盛岡藩では置かれていたんですけれども、そこの遊廓の女性たちが、この船を使って下っていくときに船が転覆して亡くなってしまった。その霊を慰めるために現在のような、こういうふうなものを流すようになったんですよ、というふうに紹介されていますけれども、いずれにしても、亡くなった人たちの供養をするということで、幕姫という方が施餓鬼供養を新山川原でやり、それが今日のこういった「舟っこ流し」にもつながっているということになります。

そのことがわかるのは、史料の八に載せておきました。これは安永8年の史料なんですけれども、新山川原において大施餓鬼の興行があるということです。「国家安全・五穀成就御祈祷」と、それから「亡霊の回向」、亡くなった人たちの供養のため、さらには「魑魅魍魎・疫病」を打ち消すということで、この新山川原のところで供養、祈祷が行われていた。それが光源院様――これが幕姫のことなんですけれども――から始まって、新山川原において行われていた、それが始まりですよということが書かれています。

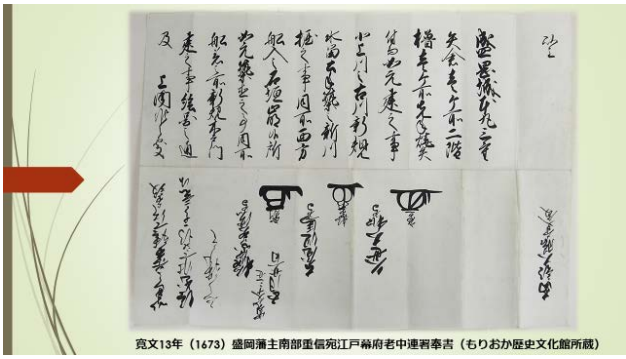
このように、北上川の、先ほど舟運の拠点ですよといった新山舟橋は、その周辺も含めて、川原も含めて、人々にとっては非常に重要な場所であり、それから人々が集う場所だったということが、この史料などからもわかってもらえるかなと思います。

ちなみに、施餓鬼供養を始めたお幕さんのお墓というのがこれなんです。そのお墓があるのが大慈寺なんです。盛岡の大慈寺というお寺があります。原敬さんのお墓がある場所です。盛岡の人たちに大慈寺というと、覚えていてもらっているかなと思いますけれども、そこだということです。ですので、舟っこ流しのときには、この大慈寺が重要な役割を果たすことになるんだということです。

こうした北上川なんですけれども、人命をも奪う驚異的な力を持つところももちろんあるわけです。今まで人々に恵みをもたらす部分、あるいは憩いの場だということを説明しましたけれども、それだけではなくて、危険を与える、そういうところでもあったんだと。

これが江戸時代の最初のころなんですけれども、北上川というのが流れてきて、お城にぶつかって流れていくという形をとっていたんです。盛岡城ができたころ、こういうふうな形をとっていた。そうすると、先ほども言ったように、お城づくりの際に、北上川が洪水すると、常に石垣が破損することになる。そこで、盛岡藩では、困ったということで、この北上川の流れを大きく変えることになります。その際、幕府に申請するわけですね。お城とか、川とか、大きく普請をする場合には、必ず幕府に許可申請しないといけないんですけれども、

その許可を願い出て、幕府のほうからこういうふうにやりなさいよという文書、それがこれになります。


寛文13年（1673）盛岡藩主南部重信宛江戸幕府老中連署奉書（もりおか歴史文化館所蔵）

ここに、「古川」、「新川」と出てくるんですけれども、古川というのが、まさにこの流れなんです。このお城に当たる北上川を直した川の流れのことを新川と言うようになります。

元文年間盛岡城下図
『絵図にみる岩手』より

で、新川はどうなったかということなんですけれども、これは元文年間、江戸時代の中期ぐらいの盛岡城下の地図になりますが、もともとはこう北上川が流れていて、こうしてお城にぶつかって合流していたわけです。先ほどのここ、お城にぶつかってしていたわけなんですが、これを直線にしたわけです。お城にぶつからないように、こういうふうな流れにしたということです。それの許可を幕府に求めて、幕府からは認められた。ですので、こちらが古川と呼ばれるものになります。こちらが新川です。新しい川の流れという形になる。かなり大規模な工事が行われて、河川の流れが変わったんだということです。

具体的にどういうふうに変わったか。今の盛岡の町並みと照らして見ていきたいんですけれども、

開運橋から岩手山を眺める（撮影）
開運橋から北上川（新川）を眺める（撮影）

盛岡駅がこちらです。ここに開運橋があって、渡っていって大通りに抜けていくほうなんですが、ですから、こちらは岩手山が見えますので、北側のほうになるんですけれども、こっちから流れてくるわけです。北上川の流れがこうあって、現在は開運橋を南のほうにどんどんと真っ直ぐ流れていくという形なんです。これが新川なんです。

それに対して、では、古川はどう流れていたかというと、大体開運橋の手前あたりから徐々に曲がっていって、ちょうど現在の大通りのほうに向かって川は流れていっていました。向こうのほうからこうやってきた川はちょうどここで曲がるんです。

開運橋から大通りへ（撮影）
北上川（古川）の流れ
御田屋清水で直角に曲がる（撮影）

ですので、ここは盛岡市内の映画館通りなんですけれども、こっちのほうが古い北上川が流れていた場所になります。ですから、徐々にこう土地

が上がっていっていますよね。こっちが下がっているわけです。これは北上川が本来こっちを流れていたので、盛岡の地形というのはこういうふうに下っていくんです。こっちが県庁のある中央通りになりますけれども、それに対して大通りは下がっているわけです。

ちょうど流れてきた川が、これが盛岡城になるんですが、ここでぶつかってこういうふうに流れていっていたということになります。この流れでは石垣に被害を与えるということで、先ほどのように、直線の、お城に当たらないような形に流れを変えていったということになります。

ここが北上川、雫石川、そして中津川、合流地点のところの写真ということになりますけれども、

そこには「杉土手」と呼ばれるものが築かれたんです。3 つの川が合流するということで、護岸するために杉土手というものが築かれたということになります。

このように、北上川の流れ、先ほどお見せしたように、本来はお城にぶつかっていたんですけれども、それを真っ直ぐな形に変えた、こういうことをしたんですよということです。

それから、北上川についてですけれども、レジュメのほうに記しておきましたが、物流と交流の場だと、先ほどお話をしてきましたけれども、北上川は非常に危険を伴う場所でもあったということです。

先ほど紹介した「雑書」を見ていくと、新山舟橋で足を踏み外して溺死する人、結構出てくるんです。やはり舟橋ですから、船を鎖でつないで、その上に板を張って往来するわけですけれども、これは非常に不安定ですから、足を踏み外して亡くなる人というのは結構出てくるわけです。

それから、北上川について言うと、そこに挙げておきましたが、「雑書」の享和 3 年 3 月 7 日の記事を見ますと、人馬が乗船しているんですね。船に人馬がともに乗っている。どのぐらいの数かというと、そこに書いたように、19 人の人間と、それから 19 頭の馬が乗っていたというのです。非常に混み合っている。船頭の怠慢で、この船が沈没してしまったわけです。

これはどこの記事かというと、花巻のほうなのです。盛岡のほうの北上川というのは、それほど深さはありませんから、これだけ運ぶことはできませんけれども、皆さん、岩手県県南のほうに行くと、北上川の流れというのは非常に大きくて深くなりますね。特に花巻以南になると、船も大きな船、これで物を運ぶようになります。黒沢尻のところから南のほうは川幅も広くなりますし、深さも増しますので、盛岡から北上の黒沢尻、ここまでは川幅もそれほど大きくないですし、深さも十分ではありませんから小型の船で、その後は大型の船を通すことができる。そういうことで、人馬乗船したときに 19 人、19 頭、これぐらいが乗っていたんだけれども、船頭の怠慢で沈没してしまって亡くなってしまったということで、この船頭がとがめられている記事が載っています。

それから、もう一つおもしろい記事が、「雑書」

の寛政元年（1789 年）の 8 月晦日条に、今の紫波町、盛岡の南に紫波町がありますけれども、そこに万龍寺（幡龍寺）というお寺があるんです。最初、もともとは、レジュメに書いてあるように、「万龍寺」と書いていたわけですが、洪水で非常に迷惑をしたということで、この「万」という字を「幡」に変えて「幡龍寺」と。「万龍寺」、たくさんの龍がいる、雨をもたらすということで、お寺がそれを嫌がったわけです。ですから、「幡龍寺」というふうにお寺の名前を変えたということが書かれています。

それから、史料編のほうをちょっと見ていただきたいんですけれども、9 ページです。先ほどは川幅の広い花巻の事例を挙げましたけれども、先ほども紹介しましたけれども、この「新山舟渡」、これは「舟橋」のときもあれば、「舟渡」のときもあるんです。洪水で流されたりして、そうしたときには「舟渡」になるんですけれども、そのときの記事です。史料の九ですが、線のところだけ読みますけれども、「今日新山舟渡込み合い、一艘に四拾人程乗り申し候処」と、すごい人数が乗っているわけですね。そうしたところ「舟込み合い候て」、明らかに定員オーバーだというのがわかりますよね、40 人ですからね。込み合って、「飯岡通久保田村治右衛門娘」である菊さん、年 19 歳の人と、それから「同所羽々村三太郎子太郎」年 9 歳と、合わせて 2 人が入水してしまったと。それで、結局菊さんは何とか見つけ出されたんですけれども、もう既に亡くなっていて、太郎の死骸というのは見出すことができなかったと。

北上川を渡る、何となくと私たち、現在はもう明治橋、近代の橋がありますから、さーっと通ってしまうわけですけれども、実はそうやって船で渡る、あるいは舟橋がかかっているときでも非常に危険を伴うところでもあったということは紹介をしておきたいと思います。

それから史料の一〇ですけれども、これは溺死者が多いと、他の聞こえもいかがわしく候と、一番最後、黒線で引っ張っているんですけれども、そこの最後のところで、「溺死等もこれ有る様相聞え候えては、他聞もいかがわしく候条」と、盛岡の殿様も、ここで亡くなる人があまりいるのでは、ほかの聞こえもよくないということで、何とかしろということで対策を講じたりもしているということです。

ちなみに、この舟橋についてなんですけれども、洪水があった際に、これは鎖でつないでいるわけですね、両岸を鎖でつないで船を並べて板を置いているわけですけれども、洪水だと、この鎖が切れて、これが流れるわけです。そうすると、川の守り番の人たちが一生懸命船が流れないようにということで、大慌てで動き出すわけです。

しかしながら、間に合わなくて、流れる場合もあるんですが、史料の一一を見てほしいんですけれども、これはすごい頑張ったので褒美でお金をもらっているんですが、「殊に新山橋舟――橋として使っていた舟が――仙台領まで流れ参り候舟、右の者共働きを以て貰い引き戻し候」、これもやっぱり仙台領のほうから引き上げてきたわけです。だから、非常に大変ですよね。こうやって上げてきたということですから、それで褒美をもらっている。そうやってこの舟橋というのは維持管理されていたということを紹介しておきたいと思います。

では、最後にレジュメのほうに戻りまして、「人と自然との関係」ということで、「共生」という言葉、これを考えてみたいと思うんですが、今、これまで話してきた内容で、北上川というのは人に恵みをもたらすところが非常に大きいということを話してきたんですけれども、一方、最後のところで、北上川というのは自然のものですから、人の力が及ばない、驚異的な力を発揮して人の命を奪

うこともあるわけです。

こういった北上川や自然をどう考えるかということで、私が東日本大震災を経て考えたこと、ということでちょっとまとめたのです。それは私、南部馬のことも研究していまして、その本の中に書いたんですが、「生命を育みまた奪いもする自然環境」ということを東日本大震災で強く私自身意識をした。そうした「自然と人間と動物との『共生』の姿というのは、単にプラスの関係やマイナスの関係ではなく、そうした関係をも含めた複雑な関係性の総体であるとの認識を一層深めることにもなった」と。

何でそういうふうに考えるようになったか。何となく『共生』というと、プラスの関係というところで描くところが多かった、あるいは人間と自然でマイナスの部分を強調されることもあったりする。しかしながら、このプラスとマイナスの関係というものを、総体化したところ、それがまさに『共生』だろうというふうに考えている。それは東日本大震災のときに、津波で何もかも失った人が、私はその後、沿岸のほうで被災した文化財のレスキューなどに行ったときに、やはり海なんかのそばには住みたくないということを言われる方は結構いたんですね。

しかしながら、3 年後とかに行くと、地域のお祭りとか、あるいは私、被災した石碑などの調査に行ったときにも、1 年後に行って配慮したつもりなんですけれども、そんなものよりも生活だろう、というふうに言われたりもしたんですが、3 年後にその地域に行ったら、その方々が立派に石碑を建て直していたんです。そういった文化とかを大事にすることは大事なんですが、海に戻りたいという方も出てくるわけです。そういった、確かに自然というのは厳しい驚異的な力を発揮して命も奪う、生命、財産を奪うわけですけれども、しかし、そうであることを知りながらも、それとともにいたいということで海に戻っていく。

北上川も同様で、これは流域の人々のつき合いですから、川からの恵みだけではなくて、当然驚異的な力によって人命も奪われるわけですが、むしろそうだからこそ、北上川と江戸時代の人々というのは非常に一体として地域にあったということが言えるのではないかなと思います。そういう意味で、『共生』という言葉を使っていきたいなと考えています。

では、これで私の発表は終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。（拍手）

兼平賢治 氏 （盛岡市出身）
岩手大学大学院・東北大学博士課程終了
東海大学文学部 講師
地方史研究協議会常任委員
遠野市史編纂委員会委員等
著書：馬と人の江戸時代
（歴史文化ライブラリー）

川とまちづくり　盛岡の街と北上川　　2017年10月29日

歴史から学ぶ川の街・盛岡の魅力

岩手大学北桐ホール

東海大学文学部　兼平 賢治

はじめに：盛岡の発展に北上川あり

1）盛岡城の築城と河川

・中世以来、三戸（青森県）を拠点に勢力を誇った南部氏
　天正19年（1591）：九戸一揆後、九戸城は改修され、福岡城として南部氏の居城に
　天正18年（1590）：奥羽仕置の結果、領地が南方に拡大　→　居城を南に移す必要性
　＊糠部、鹿角、岩手、閉伊、志和、久慈、遠野（「南部内七郡」）＋ 稗貫、和賀

・盛岡城の築城：慶長2年（1597）または3年　蒲生氏郷による勧めと伝えられる
　　花崗岩の台地と巨石、見事な石垣、北上川・中津川が天然の堀の役割
　豊臣秀吉と南部信直の相次ぐ死による中断、北上川の洪水による被害、難工事
　福岡城や郡山城を転々、寛永12年（1635）3代藩主南部重直の時、居城として定着

・城下町としての発展：上の橋、中の橋の擬宝珠（現在は上の橋と下の橋）
　　慶長14年（1609）、16年（1611）、城下形成がある程度進む
　　由緒ある寺院の移転／慶安4年（1651）盛岡23町書上（「雑書」）

2）新山河岸は北上川舟運の起点（水路）、奥州道中の城下への玄関口（陸路）

・政治の中心地の移動と海運、舟運
　京都・大坂を中心とする豊臣政権：日本海海運
　江戸を中心とする徳川政権（江戸幕府）：江戸への物資輸送は太平洋海運を利用
　　→　初期：陸送をして三陸沿岸の港を利用　やがて北上川舟運を利用するように

・元和9年（1623）から北上川河口の改修工事（仙台藩の川村孫兵衛）
　盛岡藩：寛永年間（1624～44）には石巻へ米を回漕、正保2年（1645）石巻に御蔵建つ
　　慶安3年（1650）には黒沢尻の御蔵奉行が任命される
　＊盛岡－黒沢尻間：下り半日、上り4日、黒沢尻－石巻間：下り3日、上り10日
　＊「雑書」天明7年（1787）5月13日条　本誓寺本堂建立のための用材を仙台藩領から

3）自然の恵みを人びとにもたらす北上川

・盛岡藩家老席日記「雑書」にみる北上川と人びと
　川漁に励む人々：鮭漁（献上の鮭）、鱒、鮎
　山で伐採した春木（薪）を流し、集積させていた春木場（「雑書」）：今も地名に残る

・堆積物の除去と流路確保：多くの労力を必要とした川除普請で維持

4）慰みの場所、霊を弔う場所として

・北上川の船下りを楽しむ8代藩主南部利視
　＊「雑書」元文4年（1740）7月12日条　殿様、慰みに郡山まで北上川下り
・人びとの娯楽の場でもあった新山河岸：花火、相撲などの催し物、川狩、水浴びなど

・今も行われている船っこ流し：5代藩主南部行信の娘於幕（光源院）と施餓鬼供養
　　飢饉や水難で亡くなった人の霊を慰める

5）人命をも奪う驚異的な力をもつ北上川

・暴れ川だった北上川：盛岡城にもたびたび被害　→　幕府の許可を得て流路変更
　＊現在の開運橋下流は「新川」、現在の「杉土手緑地」は河川の合流地点に築いた堤

・物流と交流の場である北上川は危険も伴う　新山船橋では足を踏み外し溺死する者も
　＊「雑書」享和3年（1804）3月7日条　人馬乗船（19人、19頭）、船頭の怠慢で沈船
　＊「雑書」寛政元年（1789）8月晦日条　志和万能寺、洪水迷惑にて幡龍寺と寺号変更

おわりに：人と自然との関係　「共生」という言葉を考える

・東日本大震災を経たいま
　「生命を育みまた奪いもする自然環境」を強く意識したし、そうした「自然と人間と動物との「共生」」の姿は、単にプラスの関係やマイナスの関係ではなく、そうした関係をも含めた複雑な関係性の総体であるとの認識を一層深めることにもなった。
　　（拙著『馬と人の江戸時代』吉川弘文館、2015年、おわりにより）

参考文献：『北上川の水運』（北上市立博物館）、『南部藩の北上川舟運と黒沢尻河岸』（同）

川とまちづくり　盛岡の街と北上川　　二〇一七年一〇月二九日

歴史から学ぶ川の街・盛岡の魅力

岩手大学北桐ホール

東海大学文学部　兼平 賢治

【史料一】天正一八年（一五九〇）七月二七日付南部信直宛豊臣秀吉朱印状
（もりおか歴史文化館所蔵）

覚

一、南部内七郡事、大膳大夫可任覚悟事、
一、信直妻子定在京可仕事、
一、知行方令検地、台所入丈夫二召置、在京之賄相続恢様二可申付事、
一、家中之者共相拘諸城悉令破却、則妻子三戸江引寄可召置事、
一、右条々及異儀者在之は、今般可被加御成敗候条、堅可申付事、
　以上、
　天正十八年七月廿七日（朱印）

南部大膳大夫との

【史料二】「雑書」慶安四年（一六五一）八月一六日条（『盛岡藩雑書』熊谷印刷出版部）

一、盛岡中町廿三町の書付御覧、自今以後は磐手町をば材木町、屋根葺町は葺手町と申すべき由仰せ出さる、

仙北町、鉈屋町、川原町、穀町、馬町、六日町、十三日町、八幡町、葺手町、肴町、新町（呉服町）、紺屋町、鍛冶町、紙町、油町、大工町、本町、八日町、寺町、三戸町、長町、材木町、久慈町（茅町）の二三町

【史料三】「雑書」天明七年（一七八七）五月一三日条（『盛岡藩家老席日記雑書』東洋書院）

一　本誓寺

本堂普請入用材木、仙台領に於いて相調え、北上川曳き登せ候に付、拾分一御免成し下だされたき旨、先頃申し上げ候処、右の御沙汰これ無き内、新山迄着岸仕り候に付、御吟味方御沙汰の趣承知奉り、不案内に手合せ仕り不都合に罷り成り候段、恐れ入り差し扣え願い上げ候段、去る九日申し出で候処、其の儀に及ばざる旨、今日寺社御奉行へこれを申し渡す、

【史料四】「雑書」寛政三年（一七九一）四月一九日条

一、雫石より御百性共剪り出し、新山へ川下げ商売仕り候五尺春木、当年迄にて請負い相済み候に付、来る子のより五か年中、壱か年五百貫文宛の御礼銭にて仰せ付けられ下されたき旨、六日町重兵衛と申す者申し出、其の筋吟味を遂げさせ、願いの通り御町奉行へこれを申し渡す、

【史料五】「雑書」元文四年（一七四〇）七月一二日条

一、殿様・彦九郎様御慰みとして、北上川御船にて御下り、今晩郡山御仮屋へ御一宿遊ばさる旨、桁内左右・印東弥一右衛門より書状を以て申し来り候に付、此の旨御役人中承知居り候様に、御目付へこれを申し渡す、

【史料六】「雑書」文化三年（一八〇六）七月四日条

一、当月十四日、新山落合明神祭礼に付、五穀成就、諸人水難除湯立神楽執行仕りたし、これにより草取り角力晴天十日興行仰せ付けられ下し置かれたし、随て木戸銭十六文・莚銭八文・桟敷一間百弐拾文、尤も莚銭木戸にて取り立て申したき旨、明神別当宗助、仙北町願人鉄蔵と申し出、日数七日願いの通り、（以下略）

【史料七】「雑書」元文四年（一七四〇）三月五日条

一、花火仕り候儀、費え成る儀に候え共、余力これ有る者は致し候儀に候間、諸士丁・町々場狭の所にて仕り候儀、停止申し付けくべく候、新山川原・紙丁川原にて仕り候義、急度申し付けず、相免しにも仕り候様思し召し候由、是れ又永田進・見坊勇、御目付共迄咄し置き候様思し召し候由、去年六月廿五日御目付共迄申し聞け候由、

【史料八】「雑書」安永八年（一七七九）二月二〇日条

大慈寺

一

当七月、新山川原瑜伽密経大施餓鬼興行仕り、国家安全・五穀成就御祈祷并亡霊の回向、麻魅魍魎・疫病消除に相成り候間、仰せ付けられ下されたし、尤も萬岳和尚の砌、光源院様より仰せ付けられ、新山川原に於いて蒙山施餓鬼興行仕り候、此の度は大施餓鬼相勤め申したく候、拙僧儀、上方にて伝授仕り候間、七月迄は間も御座候え共、諸品法器上方へ申し遣わし、外入用の品は此の方にて支度仕りたき由、願書・口上書を以

て申し出、願いの通り寺社御奉行へこれを申し渡す、

【史料九】「雑書」元文二年（一七三七）八月一五日条

一、今日新山舟渡込み合い、一艘に四拾人程乗り申し候処、舟込み合い候て、飯岡通久保田村治右衛門娘菊年十九、同所羽々村三太郎子太郎年九、合せて弐人、入水に付、治右衛門娘きく死骸は見出し療治いたし候え共相果て、太郎死骸は色々相尋ね候え共見出し申さず候旨、河原町検断訴え候旨、御町奉行これを申し出る、

【史料一〇】「雑書」宝暦九年（一七五九）閏七月一二日条

一、御目付へ仰せ渡さる御書付、左の通り、

此の間洪水の節、新山橋船数艘押し流れ候儀、畢竟御舟奉行油断故と思し召し候、右躰の節は差図を相待たず、御目付非番の者、早速右場所へ罷り越し世話仕り候わば、其の筋の者油断これ有るまじく候、舟数艘押し流れ候えは、第一往来の差し支え、尤も御費えもこれ有り候、都て右場所に限らず、水難は死生にも相懸り、至て重き事に候、御城下に於いて下知疎きにて、溺死等もこれ有る様相聞え候えては、他聞もいかがわしく候条、向後申し合わせ、何方によらず、危き場所へ油断無く罷り越し、指図仕るべき旨仰せ出さる、

【史料一一】「雑書」安永八年（一七七九）八月一二日条

一、御代物五百文宛　　御舟肝煎壱人
　　帳付壱人
　　御繕小頭三人
　　御蔵番人弐人
　　里分村利助
　　木挽弐人
　　御納船頭三人
　　立花村与市郎

一、同三百文宛

右は、当六月洪水の節、黒沢尻御納所に於いて出情（精）相働き、御納并御舟繕い入用大小材木流れ申さず、殊に新山橋舟仙台領迄流れ参り候舟、右の者共働きを以て貰い引き戻し候に付、御納奉行吟味の上、御賞の儀申し出候間、御褒美成し下されたき旨、御元締・御勘定頭共申し出、伺いの通りこれを申し渡す、

基調講演③

「富山市における水辺復活への想い」

富山観光遊覧船株式会社　代表取締役
水の都とやま推進協議会　理事長　　中村孝一　氏

きょうは、盛岡のほうへご招待いいただきまして、本当にありがとうございました。

先ほどからお二人のお話をいろいろお聞きしていて、何か富山とよく似ているな、歴史がほとんど一緒のような感じを受けました。富山城は神通川、こちらで言う北上川と中津川に当たりますけれども、本当のまちの中心を流れているわけですが、その川を外堀にして富山城が築かれまして、その神通川がなかったら、富山のまちが、多分今の場所にできていないんじゃないかと思って、こちらの盛岡城が築かれた歴史と本当に一緒だなと思ってお聞きしていました。

きょうは、盛岡のほうに水辺を、川を生かして舟運を復活できないだろうかということでご相談いただきまして、やあ、それはすばらしいなあということで、私が体験したことを参考にして、そのきっかけになっていただけたらうれしいなと思って参ったわけです。

まず、私の簡単な生い立ちがちょっと影響していまして、私が生まれたときは、太平洋戦争の末期だったのです。1944 年に生まれまして、翌年、まだ 11 カ月ぐらいだったんですが、B29 が 140 機近く飛来しまして、猛爆撃を受けて、まちの 99.7％が壊滅しました。亡くなった人だけでも 3,000 人を超える。日本の各地で空襲があったんですけれども、その空襲の中でも最も大きな被害に遭ってしまったんですね。

私は母親に背負われて、松川の笹舟に避難しまして、本当に奇跡的に助かったわけですけれども、そういったことがもしかして何か自分に影響を与えたのかな、とも思っております。

命を救われた松川

これが今現在の富山の中心の松川の風景でございます。展望台がありますけれども、あれが富山市の庁舎でして、その下を流れているのが松川でございます。現在の様子でして、遊覧船が、ことしでちょうど 30 周年になるわけですけれども、そのちょうど春のにぎわいを写し取ったものでございます。

私、空襲に遭ったために、富山から隣町に疎開したわけです。隣町が立山町といいまして、東洋のスイスとも言われる北アルプスの 3,000ｍ級の山間の立山連峰の麓にあるまちですけれども、そこで育ちました。そこは山の麓ですので、立山の雪解けの水が流れている、そういう場所で、家の前にも後ろにも小川が流れていまして、泳いだり、釣りをしたり、そういった子ども時代を過ごしました。

これが富山から見た立山連峰です。3,000ｍ級の山が連なっています。北アルプスといっていますけれども、こういったところは全国的にもないんだそうです。富山市から 40 ㎞から 50 ㎞のところにこの山があります。富山市の中心部から富山

富山市内から見る立山連峰

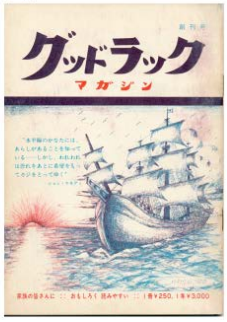
湾までは10㎞ほどで、すぐ海が迫っています。標高3,000ｍから、海の深さが1,000ｍぐらいございますので、落差が4,000ｍほどの地形になっております。

ヘドロに覆われた松川

これが昔の松川の姿なんですけれども、私も大人になってから富山のまちに戻ってきて、この姿を見て驚いたんです。あんなに美しかった松川がこうなって、もう魚もすめないぐらい、水もごらんのようにほとんどないんですね。どぶ臭で臭くて、近寄れないくらいになっていました。メタンガスも発生していますし、先ほどもお話ありましたように、川にコンクリートでふたをして駐車場にしようとか、経済界からそういった動きが出て、これは大変なことになるぞと思ったんですね。川は、そこに住む人の心を映し出すんじゃないか、私たちは一体何ていうことをしているんだということで、ちょっとこれは黙っておれないぞということになってきました。

私は少年時代、ボーイスカウトという世界的な団体に所属していたんです。その狙いは、心豊かな人を育てるという、キャンプとかもやるんですが、最終的目標は世界の人たちが心豊かに、そういうことを目的にしていた団体なんですが、その時代というのは、高度経済成長に向かって真っただ中でしたから、心よりは経済優先、もうければいいんだ、そういう物質優先の社会になっていたのです。これは大変だということで、精神面と物質面がバランスよく成長しないと、人間はだめになる、人類も滅びるということで、私たちの心をよくするためには、雑誌が一番有効じゃないかと思いまして、月刊誌を発行しました。それが1977年。題名は「グッドラックマガジン」、現在は「グッドラックとやま」という名称にしておりますけれども、何とか心の豊かな社会にしていこう、そうすれば、川もきっと美しくなるという信念のもとに、1977年の創刊ですので、ことしでちょうど40周年になります。

グッドラック創刊号



そして、市民のご意見を聞くのに座談会をたびたび開きました。そうすると、友達が東京とか県外から遊びに来ても、富山の中心部で連れていくところがないという意見が多かったんですね。私も、その市民の方々のご意見を聞いていて、そういえば、小学校5年ぐらいのときに、お隣の兼六園へ遠足で行って、園内がとにかく自然がいっぱいで、小川が流れて、滝が落ちて、池があって、そこをガイドさんが旗を持って、後ろに観光客をいっぱい引き連れて誇らしげにガイドしているわけです。それを見て、私たちにも富山城址公園というのがあるわけです。こちらと一緒ですね。ところが、そこにはほとんど観光客が当時は来ていなかったんです。それがオーバーラップして、ものすごい悔しい思いをしていたのを思い出したんです。あ、

この市民の皆さんも私と同じ思いなんだ、悔しい思いをしている。やっぱり市民が、友達が遊びに来て連れていくところがないなんて、恥ずかしいことだということで、これは富山の市民にとって最大の課題なんじゃないかということで、行政にそのことを働きかけます。

仲良くしていた担当課の課長ですとか部長さんにこの問題を提起すると、「いやあ、民間の人がそう思われるんだったら、何か考えてください」と逆提案されまして、「えーっ」と思ったんですけれども、ここは絶対これはやらねばならない大事な仕事だと思いまして、歴史を調べてみました。

そうしたら、本当に先ほどの盛岡の場合と一緒なんですけれども、神通川は湾曲して流れていまして、それを外堀に富山城を築き、城下町が発展してきた。ところが、毎年のように洪水が起こる。

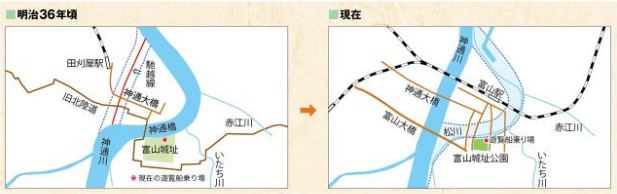
神通川と富山城

やっぱり同じように、神通川のバイパスをつくったんですね。明治の中頃、西暦で1903年のことです。2年かけまして、国の事業として、直線化します。残ったところを中州のほうを埋め立てて、現在残ったのが松川です。その松川になる前の神通川の歴史も、やっぱり船橋がかけられていまして、

神通川に架けられていた船橋（日本三大船橋の1つ）

今も船橋という地名が残って、船橋のデザインをした橋もかけられていますけれども、これがバイパスをつくって、真っ直ぐにした図です。

神通川の変遷



残った松川の川幅は、約20mぐらいあります。護岸の上のほうです。斜めになっていますので、水面で約10m前後ございます。

子どものころに、ベニスのゴンドラが光っている風景を見て、すごいとりこになったことがあるんですね。結構子どものころからロマンチックだったんです。その絵画を見ていて、うちにも水辺、松川が流れているのに、こんなところがあったらどんなにロマンチックだろうと、それこそ男女のデートコースになって、恋も芽生えるんじゃないかということで、これは写真ですけれども、当時、絵画を見まして、すっかりほれ込んでじいっと見ていたら、窓には夕日が差しているという、本当にロマンチストだったんです。

ベニスのゴンドラ

編集部が富山城のすぐ近くにありますので、松川へよく散歩に、行きました。すると、目の前を「笹舟」――小さい船なんですが、神通川でサケとかアユ、マスをとるための船を使って、船頭さ

んが、小さいお子さんを連れて、ちょうど目の前を通ったんです。

神通川の漁師さんの笹船に乗る

ベニスのような、ロマンチックな松川にしたい、そのためには船が要ると思っていたときに、この船が通ったんです。全く偶然ですね。で、思わず「船頭さん、乗せてもらえませんか〜」と言ったんです。知らない漁師さんです。そしたら、2人、お孫さんを乗せているから「だめ」と言われるかと思っていたんですが、「いいよ」と言われまして、乗せていただいて、見たんですわ。

松川の笹舟に、子どものころ、母親に背負われて乗っていたんでしょうけれども、全然記憶がないですし、その後は、もう橋の上から、土手から見ていただけですので、船から見上げた松川の……。時期が、新緑からちょっと緑が濃くなる5月末から6月にかけて、こんなに自然がいっぱいのところだということにびっくりしたんですね。写真にも感じられますね。松川というのは、川幅が狭いんだけど、もともと神通川、これは船橋がかかっていたころは川幅が約 300m近くありまして、船が64艘つながれておりました。現在、直線化してからの川幅は500mもある。

それを、水面で10m、路肩のところで20mしかない川に縮めましたから、15分の1ぐらいでしょうか。そうすると、昔の神通川時代の土手が生かされているというか、普通、こんな小さな川ですと、土手がこんなに高くないんですね。約3m近くあります。そうすると、船に乗って行き交うと、全く別世界なんですね。まるで屋根のない地下におりたような感じで、横を車が通るんですけれども、車はみえなくなります。騒音もぐっと聞こえなくなりますね。そういう別世界なんだと気づいて、あ、これは、もしかして“東洋のベニス”を目指せるのではないかと。

ベニスが、言ってみれば、潟を埋め立ててできたまちですけれども、富山は神通川を埋め立ててできたまちなんだから、現在、市の庁舎も県庁も県民会館とか、県警本部まであります けれども、そういったオフィス街全部かつての神通川を埋め立てて建っています。本当に富山の中心です。ですから、もとの市長は、ロケーションから、「松川は富山のセーヌ河である」ということを強くおっしゃったような方なんですけれども、私もその後、機会があって見ましたけれども、セーヌ河は川幅は3倍ぐらいあるかと思うんですけれども、雰囲気が似ています。パリの中心を流れています。松川も富山の中心を流れているので、そういうロケーションをおっしゃったんだと思いますが、本当に不思議な感じで、今、市の庁舎が建っている、その形も、セーヌ河の横にノートルダム寺院というのが建っている、あのデザインに非常に似た雰囲気で建っているという感じです。そして、これは“東洋のベニ”スを目指そうということで、本格的に取り組むことにいたしました。

それで、県や市のほうにも働きかけまして、河川課ですとか土木センター、それから観光関係、それから城址公園は富山市が管理していますので、富山市にも働きかけて、みんなに集まっていただいて、“東洋のベニス”を目指しましょう、富山は水の都として歴史を持っているんですから、と言いましたら、みんなもやっぱり富山に名所がないということで悔しい思いをしておられまして、「やろう」ということになったんですね。

それで、せっかくやるんだったら、皆さんに知ってもらおうということで、試乗会を開催しまして、そのときに、フランスのパリから、フランソワーズ・モレシャンという方が日本に来ておられまして、ファッションコーディネーターという肩書で、結構タレント性も持っておられて、私どもの雑誌で女性セミナーというイベントを毎年やっていたこともあって、それに来ていただいたときに試乗会で乗っていただきました。

1987年8月、フランソワーズ・モレシャン女史を招き試乗会

そうすると、モレシャンもびっくりして、こんなところが日本にあるんですねと。私、そっと聞いてみました。「モレシャンも世界中をいろいろ見ているでしょうけれども、ベニスと比べてどうですか」と恐る恐る聞いてみました。すると、モレシャンも、「ベニスよりも自然がいっぱいで、松川のほうが美しいですよ」と言ってくれたんです。別に賄賂は与えていないですよ。びっくりしまして、「本当？　モレシャンも外交辞令がうまいね」と言ったら、真顔で「とんでもない、私は本当のことを言っているんです」と。「それじゃどこがいいんですか」と聞いたら、「ベニスには自然がほとんどないんですけど、松川は緑がいっぱい。まるで森の中」。

富山市は、現在、人口 42 万の中核市。こんな大きいまちのど真ん中を、美しい小川が流れ、緑がトンネルのように覆い尽くしている。その自然も、モレシャンが乗ったときは 8 月で、緑だけなんですけれども、ほとんど桜なんですね。桜の並木が 500 本近くあります。「日本の桜名所百選」に選ばれていますので、桜のトンネルをつくり出して、桜のシーズンのほうがもっとよかったんでしょうけれども、花びらは一枚もありません。緑だけです。それをモレシャンは褒めてくれたんですね。これは可能性があるんじゃないかと、ちょっと自信を持ち始めて、では本格的にやろうということで話を進めていきました。

そして、遊覧船の会社をつくりまして、私、たまたまこういう出版業をやっていて、いろいろ富山の経済界の代表の方とも仲良くしていましたから、会社をつくりましょうということで、鉄道会社もあれば、ガス会社もあれば、船会社もあれば、誰かに社長になってもらおうと思っていたんだけれども、情熱ある人がやらないと成功しないと言われまして、当時若かったし、今も若いつもりですけれども、当時、本当にまだ 40 を超えたばかりでしたから、大丈夫かなと。本業が出版業ですから。でも、「君が言い出したんだから、君がやらなかったら誰がやるんだ。情熱を持った者がやらなかったら、この事業は絶対成功しない。」とおっしゃるんで、「じゃ、やりましょう」ということでスタートすることにしました。

資本金 1,000 万円の会社をつくって、定員 10 名の笹舟を５隻つくり、正式の許可を取るために、県の河川課長にお願いに行ったんですね。

30 年前ですから、川を生かして観光名所をつくろうなどという発想は県にはありません。治水だけです。河川課長の前へ行って、「お願いします」と頭をさげると、「ばかやろう」と言って怒鳴りつけられて、「おまえ、川を壊すのか」と言われて、びっくり。回転椅子を、ぐるっとまわし、背中を私たちに向けて、うんともすんとも言わないんです。もう黙り込んでしまった。えーっ、「だって河川課の係長も、土木センターの担当者もオーケーしてくださったのに、今になってできないとはどうい

うことですか」。それでも、うんともすんとも言わない。課長の背中がすべてを物語っているんですね。仕方なく、そのときは帰りました。

しかし、ここで諦めるわけにいきません。もう船は注文してあり、1,000 万円の資本金も経済界から集めています。今、引き下がったら大変なことになります。何度も足を運んで、とうとう河川課長が出した条件は、「それでは、毎日、遊覧船の運航が終わったら、レッカーを持ってきて船を陸上に揚げろ」と。えーっ、船事業そのものが採算合うかどうか分からないといっているのに、そんなことをしたら、赤字になるのはめに見えています。ただでさえ難しい事業なのに、そんなことをしていたら、とてもなりたちません。私たちも一歩も引けませんので、頑張りました。

とうとう、河川課長が出してきた譲歩案が、春になって、遊覧船事業をやるときに船を入れて、冬になったら船を揚げなさい、と。

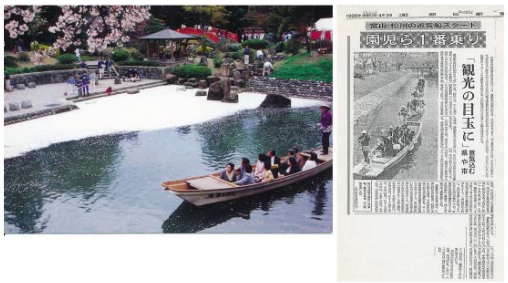
その案も採算合わないと思って反対したんだけども、結局、権力を持った者にはさからえず、泣く泣く妥協したんですね。とにかく県の許可が出ないことには正式にスタートできませんので。

そして、確約書を交わし、1988 年４月にスタートしました。桜が満開で、美しい景色ですけれども、これはちょうど花びらが散り始めたころに、風が入り江になったところに花びらを吹き寄せ、まさにじゅうたんのようになって、そこを「滝廉太郎丸」が横切っていくところです。富山城は滝廉太郎が少年時代過ごしたことで、「荒城の月」のモデルになったといわれていますが、「はるこうろうのはなのえん、めぐるさかずきかげさして」の名曲が聞こえてきそうですね。

当時の新聞です。

しかし、案の定、事業としてはむずかしく、赤字です。社長なんて名前だけで、一円も報酬は出ません。ボランティアです。県や市の補助も、一円

1988年4月、笹舟で「松川七橋めぐり」開始！



もありません。補助があるどころか、驚いたのは、船頭をお願いした漁師さんが、河川課へ行って耳に耳にしたんだそうですが、「松川に民間で遊覧船を運行することになったので、これから松川はきれいになる」、って喜んでたっていうのです。びっくりしましたね。河川課はほんらい松川を美しくする責任があるのに、その責任を放棄してしまったのです。

ところが、やっていって、恐れていたことが起きました。もともと水量が少なくて、ところどころへドロが顔を出している。そこへ船が乗り上げてしまうんですね。乗り上げたら動けません。すると、乗っている観光客が、私たちどうなるんだろうと不安げな顔、船頭さんは船からおりて、船を押して脱出して、また船に乗って。これでは、船頭さんもかわいそうだし、観光と言えない。県の河川課に浚渫をお願いすると、「松川を浚渫するとなると、県内の 350 ある川を全部しなければならなくなる」とことわられてしまった。松川だけをすることはできない、ということらしいですね。そこで自分たちで、浚渫にかかることにしました。

1993年、遊覧船が浅瀬に乗り上げないように浚渫

これは最初のころですけれども、この後、船頭に声をかけて、皆でどんどん浚渫しました。

ところが、本業が土方業でないことをやるわけですから、腰を痛めまして、一歩も歩けなくなる。接骨院あるいは鍼治療をしたり、どんどん悪くなっていきます。ほんの2カ月ほどで歩けなくなってしまいました。鍼の先生が真っ青になって、自分の責任でこの人が歩けなくなったら大変だということで、整形外科へ紹介されて、行きまして、精密検査をしたら、「あんた、何しとったんか。一生歩けんようになるよ」と言われた。緊急手術をせなあかんということになって、おかげさまで、こうして歩けるようになったんですけれども、そんなこともありました。

それから、浚渫をしなければならないということはわかったんですけれども、実は県のほうにそれを働きかけていたんですね、最初から。だけど、この川を浚渫するときは、富山県内に350前後の川があるそうですが、その川を全部浚渫しなければならないとおっしゃって、えーっ……。行政のお仕事は、全く民間はわかりませんから、こちらにしたら、県庁も市役所も富山城もある、その横を流れている川だから、治水だけじゃなくて、多少は環境も考えられて、浚渫ぐらいされてもいいんじゃないかと思ったんだけれども、そういうことをやるときは、県下中の川を全部浚渫せないかんと言われて、はあー、ということで、まあやったわけですけどね。

で、年末に、土木センターの所長さんに挨拶に行きました。そして、こういうことがあったんですよと報告しましたら、びっくりされて、所長さんは私たちが浚渫していたことを知らなかったらしくて、担当の課長とか、当時だと班長とか主任、係長、そういう方々は知っておられたんだけれども、「本来は県がやらにゃいかん観光事業を民間にこうしてやっていただいて、しかも採算も合わないことを、ましてや松川の浚渫までやって、そういう目に遭われたんですか。申しわけなかった」と言って頭を下げられたんですね。この人、偉いと思いましたね。当時の行政マンでそういう態度をとれる人はまずいなかったですから。

その人は「申しわけなかった」と言って、何と予算をとってブルドーザーを入れてくれたんです。

ブルドーザーでの浚渫

見てください、皆さん。これは実は信じられない光景なんです。こういうことは絶対できないと、当時の県の河川課は言っていましたから。ここまでやったんです。ついに松川にブルドーザーが入り、本格的な浚渫が始まったのです。おかげで松川がどんどんきれいになっていきました。

そして、当時、中沖知事が、水辺を非常に評価をしておられ、平成元年（1989年）、アメリカのテキサス州のサンアントニオを視察され、大変感動されて、私にも行ってくるように言われたんですね。そこは何と松川と同じようなヒューマンスケールな川がまちの中心を流れていて、湾曲していたところをバイパスをつくって直線化したという、全く松川と同じ川で、湾曲していた距離まで一緒なんです。1.2㎞あるんですけれども、松川も遊覧船が運航している距離は1.2㎞。しかし、松川と違って、ものすごく護岸の環境整備がされていて、「いや中村君、すばらしかった。だから、中村君も見てきなさい」と言われたんだけれども、お金は出すと言わないんですね。ただ「見てきなさい」。

だって、しがない出版社の編集長、お金がないですから、そう簡単に行けないです。毎日仕事で飛び回っているわけで、時間もないし、お金もないし、結局、行けたのは9年ぐらい後でしたかね。

やっと行けました。知事は特に飲食をやれる船に感動されていて、「飲食のできる船を考えなさい」と言われましてね、お金は出さないけど、課題だけは大きいです。（笑）

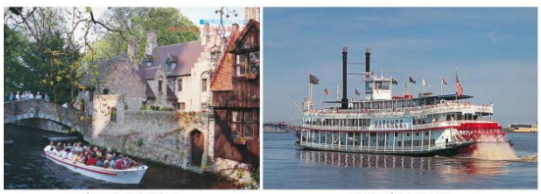
そのころになると、やっと海外に行く余裕が出て、よし、これはやる以上、徹底してやろうというのが私の性格ですので、世界中のモデルになりそうなところを駆け回りました。

世界中の遊覧船を研究

セーヌ川（フランス　パリ）　ヨーテボリ（スウェーデン）

パリのセーヌ河はもちろんのこと、これはノートルダム寺院ですけれども、今の富山市の庁舎と同じような高さの展望塔が建っています。隣がスウェーデン。この写真にないですが、デンマークのコペンハーゲンなど、いろんなところに行きました。これがブルージュ、ベルギーですね。これ

世界の遊覧船を研究（その2）



ブルージュ（ベルギー）　ミシシッピ川（アメリカ）

は、こういう川がまち中を流れていることは最初、知らなかったんです、で、そこを見てきた方が「松川とそっくりだったよ」と言われたんです。こっちは知らなくて恥ずかしかったんですけど。じゃ、ここも見てこようと。川幅はやっぱり狭くて、ヒューマンスケールで、松川とよく似ていました。

それから、大きい船も研究しようと、ミシシッピ川の蒸気船、外輪船も見てきました。その研究結果が、最初につくったこの船です。これは、富山で滝廉太郎が少年時代に育ったということで、滝

1994年、滝廉太郎Ⅱ世号が就航

廉太郎の名前をつけた2番目の船だったこともあり、「滝廉太郎Ⅱ世号」とつけました。これは世界中で研究した結果の船です。定員72名で、知事の要望である飲食ができるように、4人がけ、12のテーブルを設けました。

手前は階段状のカフェテラスになっています。松川は川幅が狭いのに、「どうやってこの大きな船がUターンしてこれるんですか？」と聞かれるんですけれども、実は世界でも珍しく、多分、松川のこの船だけかもしれませんが、双頭船になっています。船首が両方にあって、エンジンも両方につけております。それで、Uターンをしないでこの1.2㎞を往復できるような、そういうスタイルになっております。

次に、乗り場です。松川茶屋。最初はプレハブ式の簡単なチケット売り場でした。というのは、富山城の公園ですので、建物を建てさせてくれな

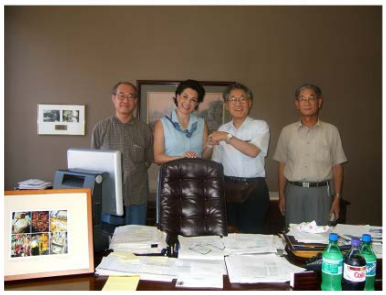
1992年、松川茶屋完成

いんですね。公園緑地課という厳しい課がありまして、公園の中に一切新しく物を建ててはいけない。春になったら、プレハブの2坪ほどのものをレッカーでおろして、シーズンが終わったらまた

積んでいくという繰り返しです。船頭たちも、この事業は一体続くんだろうか、自分たちの拠点がないわけですから、毎年移動するという、これではだめだと、不安があっては、本気で船頭たちも事業に参加できないだろう、ということで、5年がかりで市にお願いしまして、やっとこの松川茶屋を、松川遊覧船の駅舎として建てれたんですね。ですから、観光施設もあれば、飲食施設もあります。チケット売り場だけではありません。トイレもあります。プレハブのときはトイレさえなかったんです。それで、待合もできれば、駅機能を持ったものを松川の横につくらせていただくことができたんですね。

それから、サンアントニオへ知事の要請で行って、驚いたんですけど、サンアントニオ市から、我が富山市に、同じようにヒューマンスケールな川がまち中を流れているということで、我が富山市に国際局長さんが来訪され、シスターシティ、姉妹都市の縁を結びたいと言ってこられていたことがわかったんですね。

1997年、サンアントニオの遊覧船会社と姉妹提携



当時、市長さんが入院しておられ、助役さんが代わって対応されていたわけですけれども、私たち民間も、遊覧船会社同士で提携する話が進みまして、友好提携しました。この写真は3回目に訪問したときのものです。向こうの社長さんは、女性なんです。男女関係なく向こうは活躍しておられるなと思っていました。

次に、ちょっと時間が少なくなってきましたが、松川べりで、それまでイベントをやっていたんですけれども、サンアントニオを見ると、川の中の土手のところにリバー劇場という、そういうイベントができる場所をつくっておられたんですね。それで、やあ、これは私たちもこういうところを

2000年6月、リバー劇場完成

サンアントニオ（アメリカ テキサス州）

松川の土手のところにつくれないかな、と思いまして、河川課と土木センターのほうに何度も足を運びました。結局5年かかりました。その間、課長やセンター長が3人かわりました。早い人で1年、大体2年サイクルですので、5年かかりました。理解ある方が来られて、やっと許可が出まして、右側が松川にできたリバー劇場です。

ハワイアンのフラダンスがおどられているところを、遊覧船が通り過ぎていきます。国内では、全く珍しかったそうですけれども、ただの土手をケーキを切り取るように垂直に切り取り取って、皆んなで楽しめるリバー劇場をつくりましてた。

これが、2003年に「川と街づくり国際フォーラム」を開催したときのパンフレットです。このと

2003年、「川と街づくり国際フォーラム」開催

き、国交省さんも非常に応援していただきまして、これも不思議な出会いだったんですけれども、当時、国交省の河川環境課の河川室長から、富山河川国道事務所の所長として、久保田という方が

2000年にちょうど来られたときで、松川の環境整備をもっともっとしていきたいんだということを話していましたら、その方は、まさにそれをやってください、と言っておられた方が――今、こちらに久保田さんの後任の方だということをお聞きしまして、非常にうれしかったんですが――支援してくださいまして、フォーラムを開くんだったらこういうふうにやったらいいよ、と応援いただいて、これが実現できました。

それから、松川茶屋のカフェテラス、これも護岸にサンアントニオがレストランの横に階段状のテラスをつくっておられたんですね。私たちは松

2005年4月、松川茶屋カフェテラス完成

サンアントニオ（アメリカ テキサス州）　富山市庁舎と松川茶屋カフェテラスの前を遊覧船が行く

川茶屋と、松川との間に、一応テラスはつくっていたんですけれども、水辺にもっと近づけるように、階段状にできないかと思っていたところ、サンアントニオは既にやっていたんですね。さすがですよね。で、この写真を、帰ってきてからまた河川課長や所長にお見せして、これも5年ほどかかりましたね。理解のない人には「川を壊すんか」と言って叱られますし、じっくり頑張って、頑張って、次の方はどうかな、次の方はどうかな、いい人が来られたときにガーッと前進して、寄り切ったおかげでこれが庭に。階段状のカフェテラス。サンアントニオから来られた人がびっくりしておられましたね。日本にもあるんですかって。全く川に向かって階段状につくられていますので、そういう目的でつくりましたので、びっくりしていましたね。

それから、これは2隻目の遊覧船ですけれども、「神通」という、姉妹提携したサンアントニオの遊覧船のデザインを参考にさせていただいてつくりました。これは42名乗りです。

次に、「神通Ⅱ」が就航しまして。これは桜のト

2007年4月、遊覧船「神通」就航

ンネルになっていましてね、これは2年前に北陸新幹線が開業するということで、それまでに桜シーズンはものすごいお客様で、1時間半待ちという感じで、世界中から見えられるようになって、1時間半も待ち合わせるってディズニーランド並みですので、これではお客様に迷惑をかけるということで、3隻目、「神通Ⅱ」を入れまして、これは定員が44名です。

2015年4月、遊覧船「神通Ⅱ」が就航

これは地元の新聞社のフォトコンテストで写真家の方が投稿されたものが一席に入賞した写真です。こんなに行列をつくっているわけです。

2016年、地元の新聞のフォトコンテストで「一席」に

さらに、「水の都とやま」の魅力を発信していこうということで、協議会をつくりまして、これはことしの5月です。

2017年5月、“水の都とやま”推進協議会発足

「水の都とやま」魅力発信

推進協設立 会長に浅岡氏

松川を核に街づくり

クラブハウス完成祝う

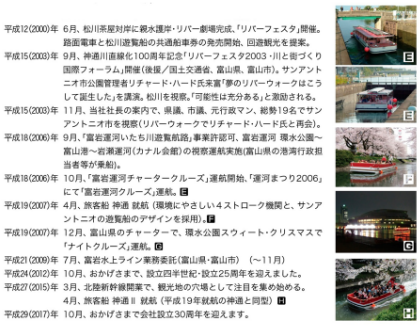
これは、これまでの富山観光遊覧船株式会社のあゆみです。松川に駐車場をつくるというところから、1975年にそういった計画が発表されて、大論争が巻き起こったわけですけれども、「グッドラック」を創刊して、今日に至っています。

富山観光遊覧船株式会社のあゆみ

◆沿革

昭和50(1975)年 松川を駐車場化する無謀な計画が発表され、大論争が巻き起こる。
昭和52(1977)年 11月、「月刊グッドラックとやま」創刊。「夢の神通川蘇」への挑戦が始まる。
昭和60(1985)年 9月、アメリカ・テキサス州サンアントニオ市から、富山市へ姉妹都市の申し込みがある。
昭和62(1987)年 8月、フランソワーズ・モレシャンを招いて、「松川遊覧船」の試乗会を開催。
昭和62(1987)年 10月、国、県、市、経済界の支援で「富山観光遊覧船株式会社」設立。
昭和63(1988)年 3月、松川丸・富山城丸・舟橋丸・滝廉太郎丸・荒城の月丸、就航。笠舟による遊覧船事業「松川七橋めぐり」運航開始。A
平成4(1992)年 3月、富山観光遊覧船株式会社(松川茶屋)城址公園内に完成。営業開始。
平成5(1993)年 10月、松川丸に環境問題に対応した電動船外機を搭載、松川の本格的しゅんせつ開始。松川を美しくする第一歩が始まった。
平成6(1994)年 3月、「松川遊覧航路」事業 許認可、旅客船「滝廉太郎Ⅱ世号」就航。B
平成6(1994)年 4月、「お花見ビア宴会船」、7月「納涼ビア宴会船」(共にキリンビール協賛)運航開始。C
平成9(1997)年 6月、アメリカ・テキサス州サンアントニオの遊覧船会社「リオ・サンアントニオクルーズ社」と姉妹提携(平成18年再訪)。D
平成11(1999)年 8月、旅客船「滝廉太郎Ⅱ世号」に環境にやさしい4ストローク機関を採用。「富岩運河遊覧航路」事業開始「全国運河サミットinとやま」に、富山県のチャーター便として「滝廉太郎Ⅱ世号」就航。初の「富岩運河探検クルーズ」「ディナークルーズ」を1ヶ月間開催。

富山には、神通川だったところに、下流のほうに、海に向かって運河も掘っていまして、1999年に全国で初めて「運河サミット」というのを開催させていただきまして、そのときに、「滝廉太郎Ⅱ世号」を運河のほうへ就航しまして、これは富山県のチャーターということで入れさせていただきました。


平成12(2000)年 6月、松川茶屋対岸に親水護岸・リバー劇場完成。「リバーフェスタ」開催。路面電車と松川遊覧船の共通船車券の発売開始、回遊観光を提案。
平成15(2003)年 9月、神通川直線化100周年記念「リバーフェスタ2003・川と街づくり国際フォーラム」開催(後援/国土交通省、富山県、富山市)。サンアントニオ市公園管理者リチャード・ハード氏来富「夢のリバーウォークはこうして誕生した」を講演。松川を視察。「可能性は充分ある」と激励される。
平成15(2003)年 11月、当社社長の案内で、県議、市議、元行政マン、総勢19名でサンアントニオ市を視察(リバーウォークでリチャード・ハード氏と再会)。
平成18(2006)年 9月、「富岩運河いたち川遊覧航路」事業許認可、富岩運河 環水公園～富山港～岩瀬運河(カナル会館)の視察運航実施(富山県の港湾行政担当者等が乗船)。
平成18(2006)年 10月、「富岩運河チャータークルーズ」運航開始、「運河まつり2006」にて「富岩運河クルーズ」運航。E
平成19(2007)年 4月、旅客船 神通 就航(環境にやさしい4ストローク機関と、サンアントニオの遊覧船のデザインを採用)。F
平成19(2007)年 12月、富山県のチャーターで、環水公園スウィート・クリスマスで「ナイトクルーズ」運航。G
平成21(2009)年 7月、富岩水上ライン業務委託(富山県・富山市) (～11月)
平成24(2012)年 10月、おかげさまで、設立四半世紀・設立25周年を迎えました。
平成27(2015)年 3月、北陸新幹線開業で、観光地の穴場として注目を集め始める。
4月、旅客船 神通Ⅱ 就航(平成19年就航の神通と同型) H
平成29(2017)年 10月、おかげさまで会社設立30周年を迎えます。

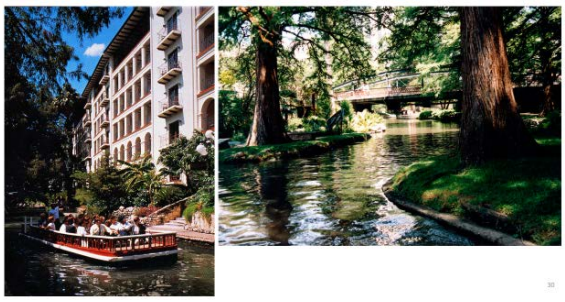
そして、ことし、おかげさまで創立30周年を迎えさせていただきました。

最後に、「“水の都とやま”の未来展望」ということで、サンアントニオの水辺を参考に挑戦していこうということで、こういった語らいがあった

“水の都とやま”の未来展望(参考/サンアントニオ)

り、緑の中を遊覧船が行き交ったり、これはホテルなんですけれども、川のすぐ横、土手の上に、日

“水の都とやま”の未来展望(参考/サンアントニオ)



本ではもちろん、こういうロケーションではないんですけれども、治水をしっかりやることで、ホテルを川べりの土手の上に建てています。

それから、その横の大木が生い茂っていますね、自然がいっぱいの、川の中にこういう大木が生い茂っているという別世界。これも治水がしっかりやれているからできていることなんですけれどもね。

そして、サンアントニオのにぎわいですけれども、カフェテラス、レストランがあって、そこを遊覧船が行き交う、まさにディズニーランドのような川の街です。

そして、これが夜の川べりですけれども、このような未来の姿を描いています。

しかし、富山も、理解できない人たちもたくさんいらっしゃいます。何を考えているんだと。富山市の中にも、こんな壮大な構想は、市はとんでもない、ついていけない、猛反対です。協議会をつくって、こういったまちにしていこうと言っても、猛反対です。闘いですわ。だから、これがいつできるか、きょう、ここで、残念ながら確約できないんですけれども、でも、私たちは実現することがもちろん目標ですけれども、過程を楽しみたいと思うんですね。きょうの平山委員長も同じ考えだと思うんですけれども、実現できるか、できないかは別だと思うんです。

こんなことわざがありますけれども、これを最後に、皆様にこの言葉をお送り差し上げて、私の最後の挨拶とさせていただきます。

皆さんご存じの方も多いと思いますけれども、ドストエフスキーがこう言っているんです。「コロンブスが幸福だったのは、アメリカを発見したときではなくて、発見しつつあったときだ。なぜなら、幸福とは、永遠の探求であって、結果にあるわけではないから」。

ありがとうございました。

中村孝一　氏　（富山市出身）
富山観光遊覧船株式会社 代表取締役
水の都とやま推進協議会 理事長
株式会社グッドラック 代表取締役
著書：「はばたけ友情の翼」（中央出版社）

太平洋戦争中の 1944 年 8 月、富山市生まれ。
近くには、富山城の外堀に利用されていた神通川の面影を残す松川がゆったりと流れていた。

1 歳になる直前、富山大空襲にあい、母に背負われ、兄弟と一緒に松川に浮かぶ笹船に避難。後に兄が、「ずっと泣き叫んでいるので、『黙らないとB29 に聞こえて爆撃されるぞ！』と必死にあやしていた」と語る。市中心部の 99.7 パーセント以上が消失し、3000 人以上が亡くなるという大被害の中、一家全員が奇跡的にも一命を取りとめる。その後、東洋のスイスと言われる立山連峰のふもとにある立山町に疎開し、美しい川の流れを見ながら育つ。

成長し、疎開先から富山市に富山市に戻るが、松川はドブ臭に覆われ、死に瀕していた。“川はそこに住む人の心を写し出す”という言葉があるが、「松川を美しくするには、そこに住む人の心を美しくすることが大切」との思いから“心の糧を与えてくれる雑誌”を創刊する事を決意。1977 年、『月刊グッドラック』を創刊。発行人兼編集長に就任。33 歳の船出だった。

そんな中、雑誌の企画で、市民参加の座談会を開催。市の中心部にある松川と富山城址公園に魅力がないため、「友達が遊びに来ても、連れて行くところがない」との意見を聞く。松川の歴史を調べる中、江戸から明治にかけ、帆船や笹舟が行き交っていたことを知り、「水の都とやま」の歴史を生かし、“東洋のベニス”をつくろうと、松川に遊覧船を浮かべる事を提案。「命を救われた松川を再びきれいにしたい。船を浮かべて鮮やかな景色を巡れば、イタリアのベネチアのようにできる」との思いからだった。

1987 年、「富山観光遊覧船」を設立、代表取締役に就任。

遊覧船運航当初は水面にヘドロが顔を出し、ヘドロを縫うようにして通らないと船が乗り上げてしまう有様。県に川の浚渫を訴えるが、「民間の事業に支援はできない」と門前払い。しかし、船がヘドロに乗り上げ、船頭が困惑する状態が続き、船頭ら 10 人ほどに声をかけ、自らヘドロ除去作業にあたる。そんな中、無理がたたり、椎間板を痛め、緊急手術を余儀なくされる。この経験から、人力では無理と判断し、再び県に掛け合い、重機による汚泥の除去が実現した。

その後、北のベニスと言われるベルギーのブルージュ（県外観光客から松川と似ていると情報を得る）や、アメリカのベニスを目指して成功したテキサス州・サンアントニオを視察。2003 年には、神通川直線化 100 年を記念し、「川と街づくり国際フォーラム」を開催、市民の関心を高める。今年（2017 年）5 月、さらに市民の関心を高めようと、“水の都とやま推進協議会”を設立。理事長に就任。

現在、松川は富山県を代表する観光スポットに成長。特に桜の満開の時期には、世界中から観光客が押し寄せ、松川遊覧船の桜のトンネルの中を船で遊覧できると、乗船客が 1 日に 2000 人になるほど盛況を見せる。

命を救われた松川への恩返しの思いと、日本中の川が美しくなり、潤いと安らぎを与えるようになればとの願いを持って、日々活動している。

パネルディスカッション

『川・水を活かした盛岡のまちづくり』

■コーディネーター　実行委員長　平山健一
■パネリスト
・リバーフロント研究所　代表理事　金尾健司　氏
・東海大学文学部　講師　兼平賢治　氏
・富山観光遊覧船株式会社　代表取締役　中村孝一　氏
・北上川に舟っこを運航する盛岡の会　事務局　阿部　優　氏
・盛岡まち並み塾　理事　金野万里　氏

【平山】　実行委員長の平山でございます。司会を務めさせていただきます。5時ぐらいまでパネルディスカッションを行いたいと思います。

パネラーの皆様は、先ほど基調講演をいただきましたリバーフロント研究所の金尾様、東海大学の兼平様、富山観光遊覧船株式会社の中村様に加えまして、地元を代表しましてお二人を入れておりまして、「北上川に舟っこを運航する盛岡の会」の事務局長の阿部優様でございます。

それから、「盛岡まち並塾」理事の金野万里様でございます。

皆様、ご存じのように、盛岡では平成21年から国土交通省が始めました「かわまちづくり支援制度」による事業が進行中でございまして、北上川、中津川の川沿いに遊歩道の整備が進みます。また、水辺へのアプローチが可能なように、護岸の整備などが進められております。

また、市民団体でも川を活かしたまちづくり、賑わいのある水辺を再生したい等、様々な運動が始まっておりまして、舟運の復活の試験運航、あるいはそれに関する講演会などが進められているところでございます。

それでは、まず皆さんに、地元の状況を理解していただくために、最近の活動状況、そして課題などを、阿部さんと金野さんからお話をいただきたいと思います。

それでは、早速ですが、阿部さん、お話をお願いいたします。

～～～　地域の活動状況　～～～

【阿部】　ただいまご紹介をいただきました阿部でございます。

実は、平山先生からうまく乗せられまして、このパネルディスカッションに登場することになりましたけれども、来ましたら、ふだんお世話になっている国交省の偉い方々とか、水とか川に大変覚えのある方々ばっかりでございまして、私ごとき者がちょっと場違いかなというふうに感じております。

私は株式会社阿部左武郎商店と申しまして、盛岡駅前で靴、履物の仕事をしておりますけれども、大体創業70周年ちょっとの会社でございますけ

れども、その会社が駅前にありまして、その事務所が駅前にある関係で、盛岡駅前東口振興会という会に所属して、そこの会長を仰せつかっております。

そして、ことし 2 月 15 日に、「北上川に舟っこを運航する盛岡の会」というのが設立されました。そのことで私がきょう、事務局ということで登壇させていただいております。

あまりの緊張に、きのうまで五十肩で肩が上がらなかったんですけれども、何か緊張で肩が動くんですね。これはあの外科の先生に教えてあげなければならないかなと思ったりしておりますけれども、パネルディスカッションの中でパワーポイントをつくってきたんです。それでご紹介しようと思ったら、立派な冊子の中にパワーポイントの映像が全部入っていまして、ただ流すだけじゃうまくないなと、それで少しお話ししながら説明したほうがいいのかなと、ここに来て今思っていまして、今からパワーポイントが流れるんですけれども、その中でちょこっとだけ口を挟みますが、私、闊舌があまりよくないもので、そのときはご了承賜りたいと思います。

「まちづくりの挑戦」ということで、もともと商店街なものですから、そちらのほうで対応させていただきました。

これは開運橋のたもとの木伏緑地公園という、こういう林の公園がございました。なかなか人が通ってくれない公園、使ってくれない公園でございましたが、盛岡市さん、そして国土交通省さんのお世話で、国体を前に改修をということで改修させていただき、広々としたイベントスペースとなっております。

このイベントスペースでは、いわて国体、あるいはふだんから行っている我々のイベントに活用させていただいております。

また、河川敷、川原のほうでも、消防演習をしたり、あるいはイベント、お祭り、たくさんの人数が出ますけれども、こういうふうな行事もさせていただいております。これはイベントだけではなく、こういった人が集まる公園にしたいなと、そういうことで挑戦が続くということになっております。

そして、いよいよ「北上川に舟っこを運航する盛岡の会」、2 月 15 日にできました。これはあっという間にできて、初めての会合をやったのが 2 カ月半前でございました。そして、2 カ月半後には設立総会、そして記念講演会ということをさせていただいております。

これがうちの舟っこの会長の村井軍一先生でございます。この懇親会は随分楽しませていただきました。

我々は、舟が出発する、あるいは到着するところ、それをよく考えないで、舟っこを流したい、それだけの思いでやりましたので、どこに舟っこをつけたらいいか、いろいろ調査したりもしました。これもみんな国交省さんのおかげでございますけれども。

これがそのときのポスターでございます。

これが夕顔瀬橋下流でございます。ボートで下ったんですけれども、ボートをトラックに積んで、また戻さなければならないという作業がございまして、人数が限定されてしまいました。

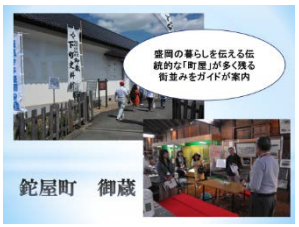
出発式が 6 月 17 日、ご覧いただきまして、この

ように立派な出発式ができました。

こっちは周遊という形で、近辺をモーターのついたボートで回っていただいた。これは国交省さんのほうにお願いして回っていただいて、この到着

地点も急遽国交省さんにつくっていただいたということでございます。

そして、到着地点からは、御蔵とか、まち並み塾、町家のほうを見学するコースも組みました。



これが昔の船橋をＣＧで再現した画像です。

盛岡にはすばらしいところがいっぱいあるんです。できればこれを組み合わせながら、まちづくりができればいいなと考えています。

川を活用し、川に対するさまざまな思いを組み合わせ、新しい盛岡のまちづくりにつなげたいと、

村井軍一会長が話したんです。すばらしい言葉だなと、私、いつも心にかけております。

そういうことで、きょうはうちの行っている事業をご説明しながら、自己紹介にかえさせていただきます。ありがとうございました。

【平山】　阿部さん、これで終わりですか。（笑）

盛岡に舟運を復活したいということで、非常に思いがけないお話だったんですが、しかも、商店をやっておられる皆さんというので、またまたびっくりして、これはすばらしい動きが出てきたなと、私もみんなで一緒に何とか実現したいなという思いになったところでございます。そういう動きが一つございます。

それでは、続いて金野さんのほうから、町家の保存の活動でございますね。

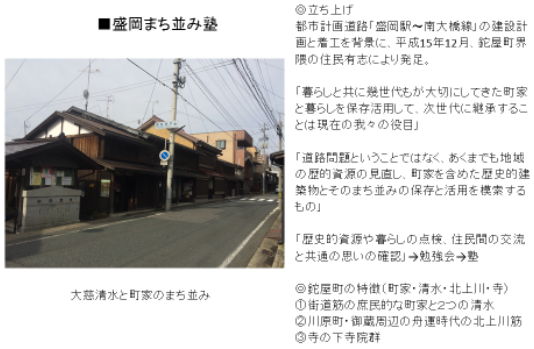
【金野】　皆さん、こんにちは。盛岡まち並み塾の金野万里と申します。きょうはどうぞよろしくお願いいたします。

私たちの活動をご紹介させていただければと思

■盛岡まち並み塾

っています。

盛岡まち並み塾ですが、この写真が象徴するように、盛岡町家を中心とした活動を行っています。まち並み塾は、都市計画道路「盛岡駅～南大橋線」の建設計画と着工を背景に平成 15 年 12 月に、鉈屋町界隈の住民有志の方々によって結成された団体です。



その後、この町家の保存を考えながら、最終的にはこの都市計画道路の白紙撤回ということをかち取った――かち取ったというわけではないんですね、一度もけんかはしておらず、自分たちの町家のよさを皆さんに訴えていくことで、この都市計画道路の計画がなくなった、結論的にはそういうことになります。そういった活動をしてきた団体です。

ことし、当初からの活動を支えてきた事務局長の渡辺敏男が亡くなりました。その後、ここ数年来検討してきたことではあったんですが、法人化を申請して、7 月にＮＰＯ法人として認可をされました。それまでは本当に一般の市民団体であったということになります。

ミッションとしては、皆さんにお配りしている資料にもあるんですけれども、「暮らしと共に幾世代もが大切にしてきた町家と暮らしを保存活用して、次世代に継承すること」、そして道路問題ということではなくて、あくまでも「地域の歴史的な資源を見直して、町家を含めて建物、それからそのまち並みの保存と活用を模索するもの」ですよということ。もう一つは、「歴史的な資源や暮らしの点検、住民間の交流と共通の思いの確認」のために勉強会を行う。先進地の視察などを行っていく。この勉強会や先進地視察などから、「塾」という形を選び、名前を「まち並み塾」としたということです。そして、ここから地域活動としてのまち並み塾というものが始まりました。

この中心となった鉈屋町大慈寺地区というところなんですが、特徴として、町家、それから 2 つの清水、それから北上川、そして寺ノ下寺院群というお寺、この 4 つが特長として挙げられるのかなと思っています。

私たちまち並み塾では、それらを活かし、誇りを持ってこの地域に暮らしていこうという取り組みをしていくということ、これを掲げているところです。

皆様のお手元に「第 33 回全国まち並みゼミ盛岡大会」の報告書をお配りしております。これは、2010 年 11 月に盛岡で行われた全国大会の報告書なんですが、これの冒頭のほうに「開催地からの報告」というところがありまして、ここに詳しくまち並み塾の活動については書かれております。後でじっくりお読みいただければと思いますし、8 つの分科会の取り組みが報告されているんですが、そのうちの 4 つについては、鉈屋町大慈寺地区の中の課題を挙げて、全国の先進地の皆さんに話し合っていただくという内容になっています。

まち並み塾の活動をちょっと紹介したいと思います。町家等の改修事業、「修景事業」と呼んでいるんですが、ちょうどこの写真がそれなんですけれども、「板塀プロジェクト」と言います。もとも

■盛岡まち並み塾

川鉄（大慈寺向い側）の板塀修景
地域の住民と子どもたちによる
「板塀プロジェクト」の成果

◎活動
①町家等の改修事業（修景事業）
町家等改修マニュアルの作成
盛岡市の改修・修理の助成金事業との連携
板塀プロジェクト
町家宿泊実験　など
②地域の歳時記を活かしたイベント
盛岡町家旧暦の雛祭り
黒川さんさの門付
井戸と町家　など
③鉈屋町中心道路の整備計画に伴う活動
歴史みちづくり事業
まちなかベンチプロジェクト
④北上川舟運復活
他団体との連携による、新山河岸跡、新山舟
橋跡、明治橋際の御蔵などのガイドツアー

とここはブロック塀なんですけれども、地域の子どもたち、大慈寺小学校の子どもや、地域の住民の方々と一緒に、板塀を張って塗装しました。

そのほかに、町家の改修、これに対して市が助成金のシステムをつくっていますので、それと連携して、相談事業などを行っています。

それから、改修した町家は、宿泊することを前提に、今、実験などを行っているところです。

それから、大きな事業として、「盛岡町家旧暦の雛祭り」など、そういった地域のもともとあった四季の歳時記、こういったものを活用した事業を

■盛岡まち並み塾

盛岡町家 旧暦の雛祭り

行っています。毎年、4月の旧暦の雛祭りにこういったお雛さまを飾って、町家の外だけではなくて、中の構造も見ていただこう、これを目指したのがこの町家の雛祭りです。

それから、8月のお盆のときには、鉈屋町にはまだ迎え火、送り火の習慣が残っていて、家々にかがり火が灯されるんですが、その中を、「黒川さんさ」がやってきて門付を行います。これもなかなか迫力のあるもので、今はたくさんの観光客、市民の方に見に来ていただくようになっています。

■盛岡まち並み塾

黒川さんさの門付

それから、こういった2つの清水を利用した活動、それから、さっき言った町家の中でいろいろお見せしたりする活動とともに、川原町――川原町というのは今の南大通三丁目のあたりなんですが――と「御蔵」、先ほど兼平先生からの報告もありましたけれども、御蔵周辺の舟運時代のいわゆる北上川筋と呼ばれるところの景観、これを私たちは大事にしていこうと思っています。

■盛岡まち並み塾

明治橋際の御蔵
現・下町史料館

この明治橋際の御蔵というのは、現在「下町史料館」という名前になっていて、明治時代以降の文物、暮らしの文物などを展示、管理をしています。これは町内会で管理をしているというところがすばらしいなと思っています。

また、北上川舟運の、ターミナルとしての川港・新山河岸跡と、その新山舟橋の記憶を伝えるという活動をしていきたいと考えています。

■盛岡まち並み塾

御蔵前の川原遊歩道へ降りる階段

かわまちづくりの話が平山先生からもありましたけれども、そういった活動にも参加させていただいて、それによって御蔵前の川原の遊歩道におりる階段がつくられました。堤防もきれいな石張り、前はコンクリだったんですけれども、それが弱くなっているということで、改修されるときに、石張りを住民の皆さんで選択して、材料がないというところ、「そこを何とか」、というふうにお願いして、張っていただくということができました。

それから、これもかわまちづくりの中でできたことですが、この界隈の案内板も設置されました。

■盛岡まち並み塾

周辺地域の観光案内板（御蔵前）

「北上川に舟っこを運航する盛岡の会」さんのイベントに参加した時の写真です。

■盛岡まち並み塾

第1回北上川フェスタ　in MORIOKA
ゴムボートから降りた方々の「鉈屋町界隈まち歩きガイドツアー」を実施

開運橋際から下ってくるときはいいんですが、どうしても到着した地点では、もう一回このゴムボートを上流に持っていかなければならないので、こうやって空気を抜いてトラックに積み込んで運ぶという大変な手間がかかるんです。大変苦労されている様子がありまして、これについてはもう少し何かうまい方法はないのかなと思った次第です。

私たちはここから先、まち並みのガイドをさせていただいたところです。

さっき兼平先生のご講演の中でご紹介いただいた舟橋跡です。こういったものがあることをまず知らせていく。兼平先生の講演で新山舟橋と新山河岸について、知らなかった方もワクワクされて、

■新山舟橋中島跡（御蔵前から）

こんなのがあったんだ、ということを思われたんじゃないかと思うんです。これがあったことをまず知らせる。そして、何とかこの地域の宝として

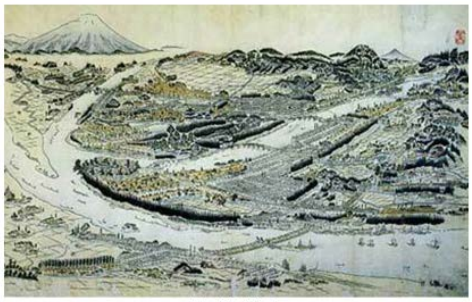
活かしていきたいと。ここって、石巻までつながっているわけですからね。

そして、鉈屋町という地域は、いろいろな街道の結節点でもあります。宮古、大槌、釜石、大船渡、陸前高田、とそういったところにも街道でつながっている。海とつながる町の入り口、結節点であるというところをお伝えしていきたいなと思っています。

■新山舟橋中島跡（仙北町側から）

こちら、仙北町側から見ると、さっきお話があった中島跡がちょっとはっきります。向こうに御蔵がみえます。この景色も、ぜひ皆さんにもっと見ていただきたいなと思います。

■藩政時代の北上川

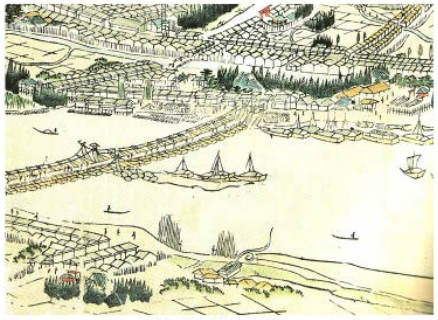


城下盛岡古絵図
川井藤亭

舟橋の絵図です。やはりこれが地域の方々の誇りですね。

鉈屋町は舟運時代の旧町名があったので、一つご紹介します。水主町（カコチョウ）という旧町名があります。これはまさに新山舟橋の舟をかけかえたりとか、新山河岸の荷卸しなどの管理をしたりする、あまり身分は高くないけれども、藩のお役

■新山舟橋



城下盛岡古絵図（部分）
川井藤亭

■舟運にゆかりの旧町名

人の一種ですね、そういった方々が住んでいた地域として水主町という旧町名が残っています。今はほとんど使われなくなってはおります。

そしてもう一つお伝えしたいのが、新山舟橋については、全く何もなくなっていると盛岡市民の方は思っているんですが、一カ所残っているところがあります。これは私たちまち並み塾としての見解ではあるんですけれども、皆さんお花見に行かれる盛岡城、本丸から吹上馬場（フキアゲババ）、腰曲輪（コシクルワ）と呼ばれますけれども、一番お花見に適しているあたりに降りていくところに

■盛岡城 本丸から腰曲輪に降りる石段

2 つの階段があるんですが、その階段の手すりにご注目いただきたい。こういった形の鎖がついて

■伝・新山舟橋鉄鎖

おりまして、岩大の工学部の先生に見せたら、「うん、これは強い力が加わったときに、少し延びる余裕を持ったつくりである。であれば、これが何かそういったものに――そういったものというのは実は“舟橋の鎖”ということなんですが――使われたという可能性は大いにある」と言っていただきました。　これは大昔から「新山舟橋の鎖」であるというふうに伝えられている鎖です。現在、お城の中の 4 カ所の手すりに残っておりますが、どこにも新山舟橋と書いていないわけですので、教育委員会的にはなかなか認定することが難しいという話でしたが、私たちはこれを、新山舟橋の鎖として伝えていきたいと思ったりしているところです。

とりあえず、まち並み塾と北上川のかかわりについては、そんなところです。

【平山】　この金属の年代を調べてもらうのはどうでしょうね。わからないかな。まあ、後で工学部にちょっと相談してみます。

【金野】　ぜひお願いしたいと思います。

【平山】　今、お話を聞きましたけれども、鉈屋町も随分まち並みが古い雰囲気、いい雰囲気に変わってきましたね。

【金野】　そうですね。町家の改修については、市と連携して、年間 2 棟ぐらいずつ改修されています。

【平山】　さっきの兼平先生のお話にも歴史遺産、水に関係のものが随分いろんなところに散在しているというのはわかりましたけれども、まさに川と歴史とまちづくりということ、3 つ考えたときに、鉈屋町なんか非常にいいモデル地区だなと思いますね。これからも我々、一緒にまちづくりをやっていきましょう。

【金野】　そうですね。よろしくお願いいたします。

【平山】　それでは、今、地元の活動をされているお二人にご報告いただきましたので、残りの 3 名のパネラーを加えまして、みんなで議論を深めたいと思います。

阿部さんの活動も、舟だけではないんですね。木伏緑地のあんなすごい整備をして、いろんなイベントをやっておられるので、びっくりしました。

それでは、5 名のパネラーがそろいましたので、改めて始めたいと思います。このシンポジウム、パネルディスカッションの趣旨といいますか、盛岡は先ほど来ありますように、3 つの川が合流して、北上川の河口、石巻から 200 ㎞でございます。そこの舟運が可能であった、一番上流のまちということになりますが、兼平先生のお話のように、盛岡城の築城以来、まちが発展しまして、川の文化は本当に豊な歴史資源として生活、まち並み、伝統行事、交通体系もそうだと思いますが、現在までその面影を残していることがわかります。

同時に、お城を水害から守るために新しい川を掘ったり、明治 43 年にも大洪水がございました。先

ほど「受難の時代」とお話がございましたけれども、松尾鉱山による北上川が汚染した時代がございました。本当にあのときは赤い水が流れる死の川でした。そして、現在も水害の危険がなくなったわけではございませんが、毎年行われている、1000 艇もゴムボートが参加する北上川ボート川下りというイベントもございます。また、我々が進めております北上川流域圏の運動もだんだん順調に進んでまいりまして、ようやく、ようやく阿部さん、金野さんがご紹介されたような、本当に夢のある市民活動が始まっているところだなと思います。

きょうはあまり時間もないので、ちょっとテーマを 3 つに絞りまして意見交換をしたいと思います。

まず最初は、我々も思い込んでいるところがあるんですが、盛岡、北上川、そして地元の歴史、この魅力とは一体なんなのかということです。先ほどほかの方からお伺いして、パッと気がついたというお話もございましたけれども、それをパネラーの皆さんが、一応それぞれにお話しいただきたいと思います。

2 番目は、川を活用したまちづくりの進め方でございます。これは川の機能はいろいろありますので、いろんな進め方がありますし、先ほどの中村社長のお話のように、非常におもしろいというか、波瀾万丈の、我々、奇跡だなと思うような進め方もありますし、いろいろあるのでございましょうが、いろんな面でご意見をいただければ、今後我々が進めていく上で参考になるかと。それが第 2 点目です。

最後に 3 点目としまして、実際にこの盛岡の地、川の大分上流部でございますが、舟運復活を具体的にするときにどんな課題があるか、ということをテーマに話し合いたいと思います。

時間が残れば、会場からのご質問も受け付けたいと思っておりますので、よろしく最後までご参加いただきますようにお願いをいたします。

〜〜〜　盛岡のまちや川の印象　〜〜〜

それでは、まず、盛岡のまちや川の印象でございます。パネラーの皆さん、全員からここは簡潔に済ませたいと思いますが、簡潔にお話をいただきたいと思います。

阿部さんから、お願いいたします。

【阿部】　盛岡はすばらしいというまち、何がすばらしいんだとよく言われると、水と緑がきれいだとか、人情がいいとか、確かにすばらしいんですけれども、それだけで盛岡を引きつけられるのかな、そう思います。かえって私どもはそこに住んでいるから、気がつかないものがいっぱいあるのかな。

私もさっき、木伏緑地公園を改修いただいたということを話しましたけれども、駅から降りて、北上川があり、そして岩手山が臨める、材木町の裏には今も舟が来たときの石垣が残っている、そういうすばらしい場所があるのに、それを活かし切れていない。そしてまた、むしろ商店街とすれば、盛岡駅前に商店街があって、それを大通りにつなげたい。でも、そこを川で分断されている。これをどうにかできないものかなと考えたこともあります。できれば、北上川にかかっているあの開運橋の北側のほうの歩道を 3 倍ぐらいの広さにして、もっとうまく大通りとのつながりができないものかなとか、そういうことをいろいろ考えていましたけれども、今度それで「舟っこ」に行き着いたわけでございます。

【平山】　はい、ありがとうございます。

川は分断という位置づけもあって、兼平先生、さっき、それが共生なんだというお話だったですか

ら、いい面、悪い面、両方あるわけですよね。ありがとうございます。

それでは、金野さん、お願いいたします。

【金野】 盛岡まち並み塾としてというよりも個人的な感想なんですけれども、盛岡はやはり水の歴史というものにとてもおもしろい点があって、城下町盛岡ができてくる時、例えばさっき兼平先生からお話があったように、三戸から盛岡に移ってくるに当たっては、多くの領民たちを食べさせていかなければいけなかったわけで、そのために、太田のあたりを開拓していくために、鹿妻穴堰をまずつくる。それから、三戸から人がやってくるので、北からの通りをよくするために、上田堤、高松の池をつくる、そして、さらにお城をしっかりつくるために、さっきあった北上川の河道改修を行う、この3つの「水と盛岡」というか、その歴史というのがすごくおもしろいと個人的には思っています。

ただ、それをいきなり開運橋というか、盛岡駅に降り立った人にお話ししても、「？」となります。今、阿部さんがおっしゃったように、岩手山と北上川の景観というのは守っていかなければいけない、一番盛岡の景観として守るべきもの。さらには、できればまち並み塾としては、盛岡八景というものがかつて藩政時代にありましたが、それにもうたわれた新山舟橋の夕景だったり、そういったものも一つ仲間に入れていただきたいなと思うところです。

【平山】 地元の状況について、適格な見方をしていることに感心します。穴堰とか上田堤とか、昔は本当に生活に密着した農業の水をとったわけですからね。ありがとうございます。

それでは、次に兼平先生、お願いします。

【兼平】 まず、私たち歴史研究者が城下町を描こうとするときに、やはり商業活動とか人というところに目が向くんですけれども、盛岡の場合というのは、やはりこの町から、これまでもお話があったように、岩手山が見えて、しかも川が流れていて、それが一体として人々の営みの舞台になっているというのが、これはもうあるようでいて、実はないんですね。

先ほどから、私の話のときにも話したんですけれども、石垣も、あれは地元の方から見ると、何だ、石しかないじゃないかと思うかもしれないんですけれども、実はほかの方、地域の人が見ると、びっくりするような石垣、見事さなんですね。

先ほどから出ている岩手山であるとか、姫神山、北上川、あるいは舟橋というのは、江戸時代の人たちで、他領の人が盛岡藩領にやってきたときに、紀行文に必ずこれを描くわけです。やっぱり外の人が見てびっくりするんですね。こんなすてきな舞台のところで盛岡というのは歴史が展開しているんだというふうに思うわけです。

そう言いながら、実は私も最近、東海大学に赴任して、新幹線で盛岡からあちらに行くと、どんどん山が遠ざかっていって、寂しくなるんですよ、私なんかは。あっちからこうやってくると、山が迫ってくるんですね。それはすごく私としては、ああ、帰ってきたなと思うんですね。

だから、外からまさに盛岡にやってくるところから盛岡の魅力というものを発信できないかなと思うんですね。盛岡に着いてからではなくて、実は来るまでのところで、この風景の変化、まさにそれが盛岡の大きな魅力で、それを伝えられないかなと。で、入ってくるところに、まさに北上川と雫石川と中津川の合流地点もあるわけですね。あそこをうまくもっと使える方法はないかなと、私なんかは感じることが多くなってきました。

【平山】　兼平先生は、ここで生まれて、東京で今お暮らしになっているから、なおそういう思いがあって、新幹線で確かに川沿いにずうっと来ますからね、そういう風景というのはいいのかもしれませんね。

シンガポールのマーライオンでしたっけ、ああいうようなものも、あそこの三川合流のところにあれば、何かシンボル的なものになるかもしれませんね。

はい、ちょっと余計なことを言いました。申しわけありません。

それでは、次、中村さんにお聞きしたいんですが、中村さんにお聞きするのは恐ろしいというか、川という、あるいは地域という文化は、そこに住んでいる人の心があらわれるものだと、何というお答えが出るか、非常に恐ろしいところなんですけれども、富山に比べて、何か違ったところはございますでしょうか。

【中村】　すばらしい川を残されていると思いますね。どうしても地元に、私たちは富山で見なれてしまうと、その価値に気づかないようになっているんですけれども、盛岡の方も、きっと毎日見ているわけですから、この北上川はどんなにすばらしくても、見なれるというのは恐ろしいことですよね。私の家内も見なれると……（笑）これ以上言いませんけれども、ものすごいチャーミングで美人なのに、見なれるということは恐ろしいんですよね。

だから、こんなすばらしい川がある、刺激を受けるために、外部の人の意見を聞くというのは大事なことだと思いますね。

まちづくりの基本は、自分の住んでいるまちをしっかり見つめることだと思いますね。すると、特徴が見えてきます。その特徴をさらに磨きをかけてやる。そうすると、日本に一つ、世界に一つのすばらしいまちになると思いますね。

【平山】　なるほどね。やはり自分でよく調べて、人から評価を受けて、それで、それをよく知ることによって個性というか、本当に発信すべきものが見えてくるということですね。はい、ありがとうございます。

では、金尾理事長。

【金尾】　あまり盛岡に縁がありませんので、よくわからないんですけれども、先ほどまちの中に大きな川が流れて、分断されていると。ある意味、都市側からすると、都市の利便からすると、大変ハンディだというようなことだろうと思うんですけれども、逆にそのハンディを逆手にとって、これをまちづくりに活かしているということじゃないかなと思います。まちの中に川があるということは、本当に貴重なことで、欲しいと思っても、なかなかできないですよね。それを兼ね備えた土地だということじゃないかなと思います。

いろんなまちの中の川がありますけれども、大体見るという対象で、多少船に乗ったりというのはありますけれども、この北上川は、松尾鉱山の水質の話もあったかもしれませんが、今はサケが上ってくるようなきれいな川ですね。だから、見る対象であり、中に入って触れて遊べるというふうな対象でもあるんじゃないかと思いますので、そういうところもぜひ活かしていかれればと思います。

地域ごとに川の特性が違いますので、先ほど兼平先生のお話がありましたように、川の歴史をしっかりと知るということ、歴史だけじゃなくて、取

り巻く社会状況、それからもちろん川ですから治水、洪水対策みたいな問題もありますので、そういうところをしっかりと地元の方々がみんなで勉強して、共通の認識を持つというところから始められるということが大事じゃないかなと思います。

【平山】　ありがとうございました。

パネラーの皆さん、それぞれに盛岡のまち、好きなところを挙げていただきましたけれども、我々が中にいるだけでも、非常にいい川だなと思っておりますけれども、やはりたくさんそういう資源があるんだと、それを外部の方からもいろんな評価をいただいたりして活かしていく、歴史をテーマにするというのは本当にいいことだということで、我々、これからいろんな仕事を、大きな発展の可能性が感じられますね。そして、本当にやりがいのあるまちづくりだなと思いますので、我々、会場の皆さんも含めて、そういう方向で一生懸命やりたいと思います。

それでは、最初の岩手、盛岡に対する皆様の印象のほうはそれぐらいにいたしまして、きょうのメインテーマでございます川を活用したまちづくりの進め方でございます。

～～～川を活かしたまちづくりの進め方～～

川というのはいろんな機能がございますので、川があれば利水とか舟運とか洪水なんかがあります。そういう現実的な恩恵、被害がありますが、安らぎとか、癒し効果とか、解放感とか、あるいは洪水の恐怖とか、そういう精神面でもいろんな影響を与えているわけでございましてまさに共生の範疇に入るものだと思いますが、我々は、こういう活動に取り組む場合に、川からのプラス面をなるべく多くもらうように。そして、マイナス面を最小にしていくというような方向で、幅広く川の活用について意見を詰めていきたいなと思うところでございます。

そういうところで、実際にまち並み保存の活動をされています金野さん、川の近くでそういう活動をされていますが、いろんな活動の中から出てきた課題等、何かございませんでしょうか。

【金野】　皆さんにお配りした「全国町並みゼミ盛岡大会」の報告書なんですけれども、実は2010年の11月に開かれたこの全国大会、このときに、この第7分科会で「城下町の川まちづくり」というテーマで話し合っています。まち並み塾としては、当時は、どっちかというと町家のまち並みとか、そういうことには注力していて、北上川のほうまでなかなか手が回っていなかったのが実際でして、何とか全国の先進事例から学びたいということでこういった分科会を開催したところです。

その中で言われたのが、盛岡の現状としては、盛岡は中津川が顕著なんですけれども、川をどうしても背にしてまち並みがつくられてしまったということがあって、なかなかうまく活かせていないと。さっき、いろいろな先進事例とか、カフェがあったり、素敵なイベントを見せていただいたんですが、ああいうことができていないということ。

それから、ある時期からはこれも金尾さんのご講演にもあったんですけれども、まち中にせっかく川があるのに、川は危ないから行ってはいけない、「よい子は川に入らない」という標語があちこちに張られるようになってしまったという反省がありました。

そして、他地域、この第7分科会に来ていただいたところは、島根県の松江、千葉の佐原、それから福岡の柳川だったんですけれども、それぞれから、例えば松江では堀川遊覧船、やはり遊覧船をやっていて、平均年齢63歳ぐらいの船頭さん100人が働いていて、定年70まで働くんだよと、こういった雇用の場にもなっているとか、それから千葉の佐原では川浚えと言いまして、どぶ川状態だったのをきれいにしたんだと。そして、今はロケ地として第一線。これは東日本大震災で大打撃を受けたんですが、回復しつつあるということです。

また、柳川はもうもちろん皆さんご存じの水郷地帯なんですが、ここもかつて住民のルールがあったのが、大洪水をきっかけにダムができたりして、すっかりそのルールが消えてしまってどぶ川になったところを、地域の方々が身銭を切ってかなり頑張って復活させて、今、花嫁船みたいな、そういった活動などもされているというような報告がありました。

これらから、盛岡のかわまちづくりにも活かせるものもありますし、ちょっと状況が違うものもありますけれども、まず共通することとしては、何よりも住民がかなり頑張らないとこれは成し遂げられないなということを感じました。

また、この先進事例の方々は、少し前の活動なので、国の補助などを受けられず苦労されたところだと思うんですけれども、今ならばそれこそかわまちづくりや、ミズベリングなどのそういったコラボレーションができるのではないかなと感じたところです。

この第7分科会のまとめをされた前野まさるさんという、当時のまち並み保存連盟の理事長さんが、こういった活用の保存三原則として、「地域文化としては、整備されていて、使っていくもので、そして価値が見えるものをぜひつくってください。」、ということをおっしゃっていました。

その辺が盛岡の今後の課題なのかなと感じたところです。

【平山】　なかなか川に背を向けたまちの状況というのは、ちょこちょこ見ますね、確かに、そう言われると、本当に川の持つ安らぎとか癒しとか、快適さとか、広々とした空間とか、そういうものの利用の仕方がまだ手薄なのかなと思いますね。

【金野】　そうですね。さっきちょっとお話ししましたけれども、せっかく遊歩道の整備もあったので、そこで市をやってみるとか、もっと何かできるんじゃないかなと思うんですね。

ただ、実は、これをつくった翌年の3月に東日本大震災が起きたわけです。私たちはこれを教科書にして、盛岡市内のいろんな市民団体がまちづくり活動も活性化していくはずだったんですが、ほとんどの市民団体が東日本大震災の復興支援に注力してしまって、この7年間、盛岡の市民活動は停滞気味というのは否めないなあと感じています。

ただ、そろそろ戻るべきものは戻って、しっかり私たちの地元も足固めをしていく時期かなと思いますね。

【平山】　金野さんの絵を見たら、住民の思いというのは、ミズベリングとか、そういう事業に反映させて、実現していくんだというふうに書いてありますけれども、金尾さんの先ほどのご講演の中でも、そういう事業のご説明をされたんですが、単にそういうことだけではなくて、実際を見ると、何か大きなものに気がつくんです。それは、やはりまちづくりというのは市町村がやっているわけですよね。川の管理というのは、多分治水の話がメインになると思うんですが、それは北上川であれば国がやるわけですね。あるいは県河川であれば県がやるわけで、そこの関係というのは、圧倒

的に力が違うんじゃないか、そんなに金尾さんがおっしゃるように、すんなり――今までの社会の中の位置づけにしても、そんなに常識が急に変わるものではないから、そこにちょっと問題が……。どういうふうにしたらそれをうまくシステムの中に入れ込んでいけるのか、そのあたりは少し工夫しなければいけないんじゃないかという感じはするんですけどね。

【金野】　そうですね。ただ、実はその舟運復活なんですけれども、私はまちづくりでずうっと言い続けていたわけです。かわまちづくりが始まって何年ですか、震災前からですもんね、ずうっとずうっと言っていたけれども、いつも無視されていたんです。それが、一発阿部さんたちが動き出して始まったというのは、やはりこれは画期的だなと思うんですね。やはり地域の方が動き出したときに、いろいろなそういった、規模は確かに国交省さんと市町村は違うかもしれませんけれども、何かしら動かせる力を、市民の動き、最初の突破口というのがあるのかなということを感じたところではありますね。

【平山】　そういう点では、やはりかわまちづくりをやっていく人材ということを考えた場合も、河川管理も知らなければならないし、まちづくりも知らなければならない。まして舟運を絡ませるといったら舟のことも知らなければならない。で、商売のこともちろんあるでしょうし、そういう人材というか、渡辺敏男さんが亡くなられて、やはりリードしていた方だから、非常に困っておられるのかなと思うんですが、いかがですか、そういう人材の必要性というのは。

【金野】　正直、当初は困り果てましたけれども、ただ、この動きがあったということは、いろんな意味で刺激になりました、まち並み塾的には。まち並み塾的に考えていたのは、どっちかというと、盛岡駅に着いた観光客の方が鉈屋町に来るのに、遠いんですね。ずうっと中央通とかをバスに乗ってこないと来れないわけです。それが、開運橋から明治橋を北上川で来ると、ものの10分くらいで来れたりするわけです。こういった水上交通ができればいいなと。それがまた風情があって、鉈屋町にあったりするといいなぐらいの、そういうことを想定していたんですね。

ただ、実際に専門家のお話などをかわまちづくりの中で聞くと、川の底の浅さだったり、河道がないことだとか、さっき先生がおっしゃったようなさまざまな課題があるということが分かりました。

【平山】　今の最後の話は、後で兼平先生からもちょっと触れるかもしれませんね、鉈屋町と結ぶという話。

それで、金野さんとばかりやりとりしていると、ほかの方の時間がなくなりますので、次に移りたいと思います。

次は、中村さんにお伺いしたいと思うんですが、まず川をよくするためには人の心を変えようということで雑誌を出された、そこが「ものすごいな」ということなんですけれども、それを事業化して、ああいうふうに会社をつくっていく中では、もっともっとトラブルというか、大きなものがあるわけですよね。本当に志が高いし、本当に粘り強く努力を積み重ねた、強い思いを持ってそれをやり遂げたんだと思うんですが、中村さんの座右の銘というのは何なんですか。（笑）

【中村】　私は、実は、今ちょっとまたアメリカで話題になっていますけれども、ケネディ大統領をすごく尊敬していまして、17歳のときに彼が大統領に就任しまして、19歳のときにダラスで暗殺

されたんですけれども、彼はいつも理想を持っていたんですね。殺されても、その理想を貫く。その理想は、勇気とか希望とか、それから向上心を絶えず持ち続けるとか、そういったものを人間の美徳として、理想に掲げていたんですね。そういうものがまちづくりをやっていくときにも必要なんじゃないかと思いますね。

【平山】 その過程では、随分つらい目というか、なかなか努力しても実現しないという、そういうのを奥様が支えられたというのは、やはり奥様も非常に……。

【中村】 ええ。もう、家内がいなかったら、この事業は1年ももたなかったでしょうね。

【平山】 それでは、感謝しなきゃだめですね。

【中村】 感謝ですね。

【平山】 それと、ことし新たな協議会を立ち上げられましたよね。世の中というのは、ますます経済優先主義、効率主義に変わってきている中で、従来の形ではなくて、新しい形を求めたというのは、どういうことなんでしょうか。

【中村】 富山市、当時の市長さんもかわられて、新しい市長が誕生する、議会は議長が毎年かわりますし、しかし、決定権はやっぱり市長なり議会が持っていますよね。私たちは何の権限もないわけですけれども、それなのに、何の権限もなく、よくこんなことをやるねとおっしゃられますけれども、本当に政治の世界というのはドロドロしていますから、本当に市長にしても、最初、一緒にサンアントニオを見に行くと言っておったのが、当時の議長とうまくいかなくて、急遽行けなかったりとか、だけど、やっていくうちに委員会をつくってくれて、自分もとうとう見に行ったり、委員会を立ち上げて何年もやっていくんだけれども、何か空回りしている感じなんですね。

やっぱりこれは、もう一度民間が中心になって、行政ももちろん支援していただかなければいけないけど、そういう協議会を立ち上げないと、もしかしたらこれで終わっていってしまうのではないか、そういう心配が出てきまして、それが今回、新たに立ち上げた原因です。

【平山】 市民中心の協議会ということになるわけですね。

【中村】 そうなんです。きょう、国交省の一番トップにいらっしゃった金尾様が見えておられるわけだけれども、数年前にミズベリングの支援をしようという動きができて、毎年のように改正されて、民間が従来は行政でないとできなかったことを、民間も対象にしましょうとか、ただし、行政もちょっと事務局的な役割を担ってもらわないと、民間 100％でも困るということで、協議会を立ち上げるに当たって、市のほうにその動きを伝えたら、あまりに壮大な計画だから、市は支援できないと。どういうことですかと聞いたら、予算が幾ら要るかわからないから、巻き込まれたくないというのが本音だということがわかりまして、ええー、そんなことがあるんだということで、結局、今、行政がオブザーバーでは入っているんですけれども、事務局とか、つくってくれないんですね。

【平山】 継続していくことが大切ですもんね。

【中村】 そうなんですね。だから、私たちの意志の力が試されていると思います。諦めるのを行政が待っているんじゃないかという感じですから。

【平山】　でも、かなり壮大な計画でございますよね。富岩運河のほうにつないでいくわけですよね、今の松川を。

【中村】　2mほどの段差があるんですけれども、その高低差を、閘門なり、あるいは川底を深くするかして解決しないといけないんですけどね。

【平山】　ぜひ頑張っていただきたいと思います。

【中村】　はい、ありがとうございました。

【平山】　それでは、兼平先生にお願いしたいと思います。川、歴史、まちづくり、合わせた何かいいモデルはないでしょうか。

【兼平】　私が今回講演の中で強調したいのは、北上川というのが共生の場であるということと、ということは、もう人々の生活の中に溶け込んでいる空間だったということですね。それを象徴するということで、今回、ちょっと強調したのが新山河岸なんですけれども、ここを何とかもう少しうまく利用できないかなということです。

それで、先ほど金野さんの話にもあったように、鉈屋町、それから城下のほうの鉈屋町と、それから新山舟橋があって、仙北町があって、そして江戸につながっていく奥州道中へと、まさに新山舟橋というのは舟運の起点でもあるし、さらに陸路においても江戸につながっていく、あるいは盛岡を全国とつなぐといういい場所なんですね。ここをもう少しうまく使うことができればいいかなというふうなことで考えています。

そうしたときに、先ほど来からいろいろ行政との関係とか、管理という点においては平山先生がおっしゃったように国ですし、まちおこしというところで言うと行政ですね、民間との関係で、いろいろと壁もある、障害もあるようなんですけれども、まさに共生というところで、行政と民間と一体になってやらないと、これはなかなかつながっていかないのかなというところですね。そうしたときに、やはりそれらをつなぐ組織、こういうものが必要なのかなと。

先ほど平山先生がおっしゃったように、どの専門家でも、それを十分につなげることとか、それをうまくやれるというところはないので、それぞれの知恵を持ち寄って、ここはうまくまちおこし、民間の動きとか、あるいは行政の立場とか、そういったところをうまく調整できる組織というのがやっぱり必要で、そこには多様な人材、能力を持った方々、いろんな分野の力というのが必要なのかなと思います。そのモデルに新山舟橋あたりがなるといいなと思います。

【平山】　ありがとうございます。ご推薦のモデルというのは、まさに阿部さんたちが進めているルートでもございますよね。ネットワークがなかなか組めないというのは、一番抜けているのは川の部分ですものね、そこがうまく結べれば、何かできるんじゃないかなと。頑張りましょう。

それと、いろんな人材を集めるというご意見、ありがとうございました。

次、阿部さんでございますが、いろんなアイデアがあると思いますが、何か課題になっているところはありますか。

【阿部】　どうしても盛岡市内の商業に関して言えば、郊外店が2つできたということで、あれ2つでも400億の売上をするわけですね。で、菜園とか大通りの売上は30％ぐらい落ちる。なかなかまち中が活気づかなくなってきている、これは大変なことだなと私は商人としては思います。

そういう中で、舟の話も相絡まって出てきている

んですけれども、もし駅前地区のあたりから舟を流して、それこそ今いろいろ話になっております明治橋のところですか、町家さんのあたりまで舟を流して、それも一つの観光にできればすごくすばらしいなと。ただ流すだけじゃだめだ、帰りのお客さんはまち中を歩いて帰ってもらいたい。そうすると、まち中の活性化にもなるんじゃないかな。

さっきからいろいろお話になっているんですけれども、歴史というのはすごく大切だなと。私、よく思うんですけれども、郊外店といろいろ競争して、盛岡のまちの中に小さいディズニーランドを持ってきても、まち中というのはなかなか繁栄できない。まち中のすばらしいところというのは、やっぱり歴史じゃないのかな。歴史をもっと掘り起こすということも必要じゃないのかな。

だから、私ら小さいころ、開運橋の近辺にも舟が結構つないでありました。遊んで怒られたんですけどね。危ないからやめろと言われたんですけれども、そういう時代があったわけです。そういう舟を、いろいろな形はあるんだと思いますけれども、それを使いながら、明治橋の、町家の裏のほうまでお客さんを連れっていって、まち中を回遊していただく。

ただ回遊していだたくといっても、まち中の歴史の整理がきちっとできていないと、魅力のあるものにはならない。だから、その辺、一体化になってまちづくりはしなければならないんじゃないかな、そういうふうに感じています。

それから、舟を流すということについて、全くの素人でした。流すと思って、ただ、じゃ、あの小繰舟を借りてきて、開運橋のところに浮かべて、そこから流せばいいんだと、全くの素人でした。浅くて流せない。舟を運ぶには100万円かかるとか、全くわかりませんでした。船着場もなければ、舟を入れるところもないし、全部国交省さんにお世話になって、今度のボートのことでもやっとできたという現状です。これは我々の民間だけでは全くできることではない。これからはぜひ、そういうお力をおかりしながら、ぜひ盛岡の下流から舟を流して、そしてまたまち中の活性化にもつなげたい、そういうふうなことができればいいなと思っております。

【平山】　ありがとうございました。

我々も水辺が復権してくるのは大変うれしいことでございますよね。応援のいろんな仕組みが、国のほうでもお考えになっていると思いますが、皆さんのご意見を伺って、何かありましたら、よろしくお願いいたします。

【金尾】　水辺を活用しようとすると、常にどうなるかというと、地域住民の方々は、どうしてこういうことができないんだ、だめなんだ、という話なんです。管理者は、そんなことをして誰が責任をとるんだと。それから、営業活動をしたいと思う人は、何であいつはよくてうちはだめなんだ、そういうふうになるわけです。それぞれ、おっしゃっていることはもっともなことだし、話がかみ合わないんですね。

そのときに、先ほど中村さんからも話が出ましたように、間を取り持つ組織、協議会かもしれません、兼平さんもそのお話をされましたけれども、そういう専門家というか、それぞれの立場のステークホルダーの間を翻訳できるような中間的な存在が必要。これはいろんなところで、全国でそういう活用するところで、そういう声が上がっていますけれども、そういう組織が要るんじゃないかなと思います。

その意味で、例えば北上川のフォーラムの方々がそういう役目を果たされてもいいんじゃないかなと思います。そういう組織をしっかりつくってい

く、その人たちが間に入って翻訳していく、中間的な存在というのはものすごく大事だとまず感じております。

【平山】 役所も十分応援していただけるということでご理解してよろしいわけでございますね。ありがとうございます。

～～～ 舟運の可能性 ～～～

時間が10分ぐらいしか残っていませんね。残っているのは、舟運の可能性、実際の具体的な話なんですけれども、そこに移りたいと思います。

北上川というのは、河口まで堰がないので、200㎞、盛岡で乗ったら石巻まで行くという川なんです。それで、ここで舟運の話をすると、ここから河口までボートのマラソンをしようということも一つあると思います。

先ほどありましたように、開運橋から新山河岸まで舟で行って、観光というか、歴史のいろんな資源等を合わせてコースをつくろうというのもあります。また、四十四田ダムから開運橋ぐらいまで、いわゆる半分ラフティングみたいな感じの、自然の中の激流の中を下りながら、下のほうに来るとビル街に入るというような魅力あるコースもあるので、上流部だからこれができることなんですけれども、そういうことを念頭に置いていただいて、一言ずつ、舟運の具体化に対するご提言をいただきたいと思います。

阿部さんから。

【阿部】 この、舟のことに関しては、いろいろ考えたり勉強すると、随分知らないで話をしているんだなという自分の浅はかさに気づくわけでございます。ただ、やはり川は、私らが思っていたような例えば舟を流すだけじゃなくて、うちの会長である村井先生が話したとおり、川を活用し、川に対するいろんな思いを組み合わせる。そして、新しい盛岡のまちづくりにする、この言葉が私、好きなんですけれども、そういう気持ちでこれからやっていきたいな、そのように思っております。

【平山】 はい、ありがとうございます。

それでは、金野さん。

【金野】 舟運復活にいろいろ難しい点があるというのは、大分わかってきたかなと私は思っているんですけれども、ただ、今、まずは可能な、舟の活用、例えばこの間のゴムボートもそうだと思うし、カヌーなどで使われている方もいらっしゃるようなので、今できることからまず始めたらどうかなということを感じます。

それから、私のスライドの最後のところの2枚だけ印刷していただいているんですけれども、まずはどんな川辺、水辺にしたいかということを描いてみるというのをしてほしいなと。これもかわまちづくりで前からずうっと言っているんですけれども、港をつくりたいなら、港をその上に重ねて描いてみる、そういったことを、例えば地域の子どもたちも一緒になってやるというようなこともどうでしょうか、と思います。

■ミズベリング ホームページより

実際、花巻で宮沢賢治の作品にあるなめとこ山が

どこかということを示すアクリル板の表示があったので、参考に載せたんですけれども、例えば新山河岸がアクリル板を透かしてもしそこに描かれ

■花巻市「なめとこ山」の透明アクリル看板

ていると、いろんな人が実際の舟運や北上川に関して興味を持って参加してくれるのかなと。具体的な舟運ということについては、さっき言ったように、今できることからということを感じます。

【平山】　やはり多くの人に興味を持ってもらうようなことを考えなければいけないですね。ありがとうございます。

兼平先生。

【兼平】　歴史的に言うと、江戸時代から明治になって、舟運から鉄道というように取ってかわられるんですけれども、では、川の魅力というのが失われたかというと、そんなことは全くないわけですよね。人を引きつける魅力があるし、しかも、先ほど来から皆さんおっしゃるように、やっぱり盛岡の魅力というのは、景観ですよね。川を含めた景観がこれ一体として活用できるというところが大きな魅力だと思いますので、ぜひ、まさに舟運というのは、そういう意味ではいい観光資源になり得るかなと。

それから、先ほど阿部さんのお話で、ああ、そうかと思ったんですけれども、下るだけではなくて、戻ってくるというところですね。ここが、やっぱり散策してもらいたい。盛岡を散策する。私、講演のときにちょっと挙げましたけれども、古川をまたたどってくる。盛岡の地形とか、最近は「ブラタモリ」が人気ですけれども、まさに盛岡を歩いて散策して、地形の変化であるとか、そうしたときには、私たち、歴史の分野が頑張らなければいけないかなと思うんですけれども、そういったところで歴史もうまく絡んでいきながら、まちづくり、それから活性化というところにつなげていけたらすごくいいなと。北上川を丸ごと使って、歴史も、それから今の北上川も、それから昔の古川も、これを丸ごと使った活用というのができればすごく魅力的だなと思います。

【平山】　ありがとうございます。

中村さん、我々の話を聞いていて、何かご示唆というか、ご指導をお願いできればと思うんですが。

【中村】　やっぱり長期戦だと思うんですね。そのためには、若い人を育てていかないと、私もいつの間にか30年たって、始めたときは若かったんですけれども、こういう年齢になってしまいましたので、今、若手を育てるのに一生懸命になっているんです。最後は、我々のまちづくりに対する意志の力が試されているんじゃないかなと思うんですね。

ビートルズが生前言っていましたけれども、「平和を実現するためには、意志の力にかかっている」と言いましたけれども、私たちも、まちづくりは本当にやる気があるのかどうか、意志の力が試されているんじゃないかと思うんですね。

盛岡の北上川を中心に、50年、100年あるいは1,000年もかけて、しっかりした水のまちをつくっていくんだ、こういうまちは少ないですから、川がまちの中心を流れている。最終的にはベネチアがそうなったように、世界遺産を目指すというくらいの意気込みで、頑張っていきたいと思います

ね。

【平山】　中村さんがおっしゃるから、みんな、そうかと思うんですけれども、松川ですごいご経験をされて、みんな友達だというボーイスカウトなんかの活動をされて、そこまで行ってもやはりこれほど高い志というか、なかなか持てないですね。やっぱり中村さんのお人柄そのものなのかもしれません。あるいは、奥様の支援なのかもしれないですけどね。

【中村】　それは大きいと思いますね。（笑）

【平山】　本当にまず高い志も持つこと、で、積み重ね、積み重ね、誠実に努力を重ねることですね、そういうことだと思いますね。本当にありがとうございます。

最後に、会場でどなたか、何かご質問がある方、おられませんか。――はい、どうぞ。

【質問者】　質問じゃなくて、責任を感じている人間の一人です。今から40年以上前に、商業地域近代化計画というのを盛岡市から委託を受けて、計画に長く携わった人間ですけれども、それが今、雫石から南の都南地域の地域開発が起こっているわけです。

今話題になっている川を中心にした資源としての川の利用をどうするかというのが基本的な発想として、一番平たく言えば、いいことじゃないのかなと思うんですね。そうすると、舟運だとか、いろんな話題も出てきましたし、観光資源としての位置づけもできました。

しかし、私は盛岡というまちを見ていて、日照権問題というのは、僕も建築審査会の委員長をやりましたけれども、初めて1点だけ出たんです。今まで出ていません。つまり、そのくらい城下町以降、北のほうには農業試験場が国の施設や県の施設に、農地が使われている、あるいはフラットに岩手山麓まではそういう土地利用ですね。そして完全に城下町から南につながっていくところは、皆、住宅地化とか、今、新しく都市の再開発の形の流れになっているわけです。したがって、そういうところのバランス的なものをイメージの中に持ちながら、北上川という川をどう利活用していくか、そういうもう少し大きな、グローバルな発想で展開していくことがどうなのかなと思いました。以上です。

【平山】　ありがとうございました。

ほかに何かございませんか。よろしいですか。

それでは、金尾さん、最後におまとめになりますか。よろしくお願いいたします。

【金尾】　まとめるということではないと思うんですけれども、舟運の話が出ましたので、実は東京の日本橋川とか、隅田川の遊覧船とか、走っていますけれども、今、多くの外国人の方が乗っておられて、非常に人気がありますね。

それから、実は、そういう遊覧船だけじゃなくて、亀島川から神田川に出て、隅田川に出て、日本橋川を通って、帰ってくる、この三角のコースをカヌーでやるという、それも外国人が随分入っています。そういう意味では、観光とか、そういう面でも、ものごく舟運というのは可能性が高いと思っています。

それで、どうしても舟運ということになると、安全対策はどうするのかということが一番大きい話だと思うんですね。どうしても川である以上は、安全重視で、制約は絶対ある、それはもう仕方ないことだと思うんです。ただ、そうは言いながら、河川管理者の方にはぜひ度量を持ってもらいたいなと。だめなことはだめとしっかりと言えばいい

んですけれども、だめなことしか言わなくて、できることをなかなか言わないんですよね。だから、こういうことはだめだけど、こういうことはできるんだというところまで少し皆さんと、これは信頼関係ができないと、なかなかできないと思いますけれども、そういうこともぜひ皆さん方に発信していただくような度量を持ってほしいし、逆に、地域住民の方々、私はそういう立場なんですけれども、何でもかんでも事故が起きると行政に責任を押しつけるということではなくて、自己責任といいますか、やはりこちらのほうも自立をしていくということが大事じゃないかなと思います。

先ほどから人材というお話が出ていますけれども、きょうも国交省の方はたくさん来ておられます。私もよく存じあげている方ばかりなんですけれども、度量を持った方々ばっかりですので、ぜひいろんなことに心開いて相談していただければなと思いますし、また役所の立場を離れられました、きょう協賛の東北地域づくり協会の理事長も今、あそこにいらっしゃいますけれども、河川環境課長をやっていましたので、非常にお詳しいので、いろんな面で相談に乗っていただけるんじゃないかなと思いますので、ぜひ皆さん、知恵を結集して、いい盛岡のまちづくりをしていただきたいなと思います。

以上です。

【平山】　ありがとうございます。

最後の一言だけでも、大分きょうのシンポジウムの意味が深まったような感じがいたしますけれども、やはり従来の意識じゃなくて、もう少し一歩進んだ、何か新しいものに取り組む体制、そのためには知恵を集めなければならない、これはまさしく一つの境界分野なのかもしれませんですね。

ですから、本日ご出席の皆様、自分たちだけでやるんじゃなくて、いろんな能力を持った人、そして地域の幅広い流域という単位の中でそういう問題を考えていけばよろしいんじゃないかなと思った次第でございます。

時間になりましたので、これで終わりたいと思いますが、きょうは、パネラーの皆様、そして会場の皆様にも、最後まで本当に熱心にご聴講いただきまして、まことにありがとうございました。

それでは、このシンポジウムを終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

阿部 優 氏（盛岡市出身）
北上川に舟っこを運航する盛岡の会 事務局
盛岡駅前東口振興会 会長
株式会社阿部左武郎商店 代表取締役

金野万里 氏（盛岡市出身）
盛岡まち並み塾 理事
NPO法人いわて景観まちづくりセンター　理事
SAVE IWATE 事務局長 他
ライター・編集者

シンポジウム　川とまちづくり「盛岡の街と北上川」

北上川「流域圏」フォーラム実行委員会（構成機関）

北上川リバーカルチャーアソシエーション、NPO法人北上川流域連携交流会、
ガイア展勝の会、（一社）いわて流域ネットワーキング、をんな川会議、川を知る会、
北上川フィールドライフクラブ、NPO法人奥州・いわてNPOネット、
水とみどりの環境フォーラム・ものう、くりこま高原自然学校、NPO法人りあすの森、
国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、北上川下流河川事務所、
北上川ダム統合管理事務所、岩手県、宮城県

事務局：㈱展勝地　みちのく民俗村管理運営事業部

岩手県北上市立花14-62-3　〒024-0043　TEL　0197-72-5067　／　FAX　0197-72-5074

E-mail:　info.river@kitakamigawa.or.jp